
守護の乙女 「ヴァルガーナ」

ルート・西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護の乙女 「ヴァルガーナ」

【Nコード】

N7562J

【作者名】

ルート・西

【あらすじ】

どこにでもありそうな普通な街 「神輪町」 しんわちよう
平凡なこの街で育った十五才の元氣少女 「赤星 高美」 あか
ほし たかみ はある日、 赤い光 が空から落ちるの一瞬だけ目
にする。

気になつたら確認しなくては気が済まない高美は早速行動を開始し、勘だけを頼りに学校裏の高台を目指すのだった。

戦う変身バトル少女アクション！！

—— 天空 に羽ばたく 炎 の翼 燃え上がれ ヴァルファイア
ス ！！

0 〰️プロローグ

異世界 エレメンテ そこは洗練された魔法と高潔な人々の精神、
そして清らかな輝く 水 の 大海 生命の 樹 と 大地
広がる 天空 から見守る聖なる 炎 の太陽。幸福の夢幻世界。

ここは、素晴らしき世界……だった。

それは突然の災厄。 エレメンテ は別の世界の 暗黒 に呑み
込まれた。

世界を汚す 侵略 である。

エレメンテ の人々はこの世界を救う為に決断をした。

炎 の 守護

水 の 守護

樹 の 守護

守護神 の力を受け継ぐ三人の 勇者 に世界を託して。

勇者 達は一時的に エレメンテ を離れる。不完全な 守護
の力を完成させるために。

別世界の心の 炎 水 樹 の強い力と合わさることとで完成
すると言われている。

エレメンテ の人々はそれを 伝説 と呼んだ。

伝説 の ヴァルガーナ と。

勇者 達が旅立つと同時に。それを察知するように 暗黒の
使徒 も世界を飛んだ…………。

そして、舞台は我々の世界へと……………移る。

1・赤星 高美 の今日という日

「いつてきまゝす！」

首のタイの位置を直しながら紺色のブレザー制服に身を包んだ少女が玄関から元気に飛び出した。キュツと使いなれた運動靴が小さく鳴り学校に向かう方角を整え、長めのポニーテールが揺れる。小脇に抱えていた通学鞆を右手に持ち変えるとハイソックスの脚を踏みしめて、全力で駆け出し

「高美！ お弁当は！！！」

後ろから母の声が響き、つんのめりそうになりながら方向転換する。

「忘れてた！？ お弁当！！！」

母の手から赤い包みの弁当袋を受けとると、今度こそ全力で学校へと向かった。

「まったく」

娘の後ろ姿を見送りながら母はため息を吐いて、いつもの朝の行事を終わらせる。

「あ、そろそろ開店準備急がないと」

母はそういつと自宅権喫茶店の我が家へと入っていった。

「遅刻！ 遅刻かも！？」

ポニーテールを振り乱しながら全力で通学路を駆け抜ける少女。彼女の名は高美。「赤星 高美」 あかぼし たかみ 十五才。これから始まる物語の最初の主人公である。

高美は全力で走る。遅刻を避けるために風となる。稲妻のように人の波をジグザグにステップを踏み駆け抜ける。

それは、素晴らしい反応速度で次々とかわしていった。全ては遅刻を回避するために。

だがしかし、高美は気づいていなかった。途中から自分と同じブレザー姿の少年少女達がゆっくりと談笑しながら登校、もしくは啞然と走る去る女生徒の背中を見送る視線の数々に。

「遅刻は、まずいよ！？」

既に彼女は遅刻ではなく誰よりも早く登校するように走っているように見えた……。知らぬは本人のみ。

そして、そんな高美の無茶な反応速度と全力疾走は限界を迎えた。

目の前に見えるは交差点。高い塀に隔てた曲がり角。だが、高美が目指すはまっすぐだ、このまま駆け抜けるのみ。

そう安易に考えていた。

「のっ！？」

だが、こういう場所では突発的に事故は起こるものだ。

曲がり角からパツと人が現れる。その上着を見るからに高美と同じ学校の生徒だろう。だが、高美にはそれを確かめる程の余裕は無かった。その生徒はiPodらしきものをイヤホンで聴いており、高美には気づいていない。高美も急には止まらない状態だ。

「だっ、めっ、トウオオオツツ!!?」

それでも全力の急ブレーキを駆ける。運動靴が悲鳴を挙げて靴底が一気に磨り減り、猛烈な砂ぼこりが舞う。

だが、それでも止まらないものは止まらないものだ。

「うおっ!?!」

「どうえっ!?!」

物凄い音を起てて両者はぶつかり、転がりあつて倒れた。

「ってえゝ。なんだよもう」

頭を片手で押さえながら相手側の生徒が上半身を起こした。

「ご、ごめんなさい」

高美も頭をクラクラさせながら体を起こして謝罪の言葉を述べた。

「いや、こっちも曲の方に意識いつてて前方不注意だった。ごめん」

相手側の生徒も自身の不注意だったと頭を下げた。

高美は慌てた。こっちの方がずっと悪いと思っていたので頭を下げられるとは思わなかったのだ。

「か、顔上げて下さい！ こっちの方が全然悪いですから！？」

高美はワタワタと手を振りながら相手側の生徒に怪我が無いか確認する。

「ん？ いや、こっちの不注意もあったとはずだぜ？」

相手側は顔を上げた。別段顔に傷らしいものは無く。体も大丈夫そうだった。高美はホッとしてその生徒を見た。

頭をポリポリと掻いているその生徒は元々なのかぶつかった時に乱れたのか解らないが適当に切り揃えたらしいボサボサの無造作ヘアだった。そして、その服装は制服の上着を羽織っているが、その下は学校指定のジャージを着こんで何処と無くもつさりとした奇抜な服装だった。いつもなら、高美はその恰好について聞きたいところだったが、今はそんなことを聞くような時では無かった。

なにより高美は・・・・・・・・

「わあっ！ 遅刻してたんだっ！？」

自分が遅刻していると思い込んでることを忘れていたのだった。

「ごめんなさい！？ 後でまた謝りにきます！？」

「え、あ、いや、別にいいんだけど」

「じゃあ！ 間に合えええっ！！」

再び全力疾走で高美は駆けていった。後に残された生徒は啞然とそれを見送った。

「遅刻って……バスに乗り遅れるのか？ あれ、でもうちの学校の生徒だよなあれ？」

服装は見間違えじゃないはずと首を傾げながら生徒は立ち上がった。

「ま、なにせよ変な先輩 だったな。ん、でも オレ 程じゃないか……」

高美よりも背の高いこの生徒は、実は今年入学の 新入生 であるのだが、高美はその事に気づく事は無かった。その女子生徒はは苦笑して高美と同じ方向へと向かい始めた。

「あれ？ れ？ れ？」

そして、当の本人は教室に着いてまばらなクラスメートの数に目を丸くして瞬きを繰り返していた。

そして

「あ、おはようございます高美ちゃん。今日も 早い ですね」

後ろから時間差で登校してきた幼なじみ「青海 流香」 おうみるか の一言で、自分が既に 遅刻 では無い事に今更気が付いた。

「うわー、またこのパターンじゃん!!」

高美の悔しい叫びと共に、「矢神学園」 やがみがくえん 中等部 二年B組の平和な今日の一日が本格的にスタートするのだ。

「うえー、お弁当があ~~~~」

お昼休み。仲の良い友人同士で食べるお弁当という物は格別である。気持ちの切り替えにお昼の補給はとても大事だ。

と、心の中で赤星 高美は語り、友人達の彩り鮮やかなお弁当の数々に目を奪われながら、自分もみんなの前でお弁当をバカッとお披露目となったわけだが

「あら」

「おっ」

「これは」

「うーん……………」

友人達は四人。口を揃えて高美の弁当へのご感想を述べた。

『みごとに、混ぜご飯……………』

「ああ……もう、メチャクチャだよ」

高美は頭を抱えて机に突っ伏した。

恐らく、今朝の全力疾走のせいだろう。今日のお弁当は運が悪いことにおかずに余分なスペースがあり、ご飯の上に転がり転がり、戻りに戻りを繰り返して、完全な混ぜ混ぜ状態が完成してしまった。

昨日の晩に残してしまった酢豚の残りも、大好物のプチトマトの入ったサラダも、父のお手製自慢の「冷めても美味しいミニマカロニグラタン」も、ご飯の上で混ざりあい。

「ご飯の上のピカソ展や」

となり、高美はますます名前とは真逆のテンションになってゆく。完全に自業自得とも言えるのでグーの音も出ない。

「ま、まあ、元気出して」

「一個一個は美味しいもんなんだから美味しいよ………たぶん」

「あー、そうだ。少しダイエットしなくちゃいけないから一つあげる」

「高美ちゃん。良かったらお弁当の交換しませんか？」

なので余計に友人達の優しい言葉が胸に痛かった。

「うん、みんなありがとう・・・そうだねちょっと形が崩れただけだし、ママとパパのご飯は美味しいもん。変わった中華丼だと思えば・・・」

高美は覚悟を決めてマイ箸を手に取った。

「いただきます!!?」

目を瞑りハグツと口にした。モグモグと口を動かす。

「ど、どう?」

「あんまり無理はしないで」

「ヤバかったらパン。パンあげるから!」

「じい・・・」

固唾を呑んで見守る友人達の視線を前に、高美はGokuriと一口目の弁当を喉を鳴らして飲み込み、静かに感想を口にした。

「レタスのシャキシャキ感と・・・なんだか甘酸っぱいよ
うな、まろやかなようなのが・・・混ざりあって・・・
少しだけ口の中にお肉が入っていて・・・それが結構な歯応えで」

パツと目を開いて真面目な表情で高美は
「意外と美味しいかもです」

グツと親指を上げてニツと笑った。

「ぷっ」

『アハハハッ！！』

真剣な顔で聞いていた友人達は高美の言動に思わず笑ってしまった。

「なに、不意打ちってやつ？」

「ま、マジ、やら、れた」

「おのれ、卑怯な、あゝかゝぼし」

「わゝ、みんな面白いです」

友人達はそれぞれの反応で高美のテロ行為なネタを返した。

友人のひとり、幼なじみの流香からは拍手を貰った。

「はゝ、みんなの笑いで気持ちの充電完了だよ」

ニンマリ笑ってそれほど悪くも無かった混ぜ混ぜな弁当をパクパクと高美は食べ始める。

そのニコニコとした表情の高美を見て友人達は優しく微笑んだ。

「やっといつもの高美だわ」

「ま、いつもの事ながら沈む理由も何でもないことだけど」

「何でもないことで持ち上がるほうが早いから良いよね。元気になる
ったらマジ無敵だし高美」

「うんうん、ですよね」

そんな友人達の声に高美は顔をあげる。

「ん？ なに？」

友人達は声を揃える。

『高美は元気だなって話だよ』

「んゝ、んんむ？」

高美は良く解らず首を傾げた。

「そういえば、高美は今日どうすんの？」

お昼を食べ終わった後、友人の「南」　みなみ　がそんなことを聞
いてきた。

「今日？」

「ほら、運動部の助っ人よ」

それを聞いて、高美は ああ と声を漏らす。

高美はたまにその運動能力を活かして運動部に助っ人の出張をやっている。結構引っぱりだこなちょっとした有名人なのだ。勧誘の話もよく来るが、どれか一つに絞り込みたくない高美は全てを断っている。

「今日は……ないかな？ うん、無い無い」

今日の助っ人の予定は自分の聞いている範囲では無い事を頭の中で確認する。

「あら、今日は高美ちゃんのフリー日ですか？」

綺麗な長い黒髪を揺らし、お人形のような朗らかな微笑みで流香が高美の顔を覗き込んでくる。

「だったらうちのスイミングスクールに来ませんか？」

綺麗な容姿と丁寧な言葉使いの流香は人からは何処かのお嬢さまと間違われるが、彼女の家は両親が「スイミングスクール・イルカコミュニケーション」を営む至って普通の中流家庭である。丁寧な口調は祖母の影響からくる癖で幼なじみの高美にも普通に使ってくる。本人は友達間では治そうと目下努力中である。

「イルコミでなにかあるの？」

「いえ、ちよつと永くんがたまには連れて来いと言うもので……」

「永ちゃんが？ なんのようдар？」

永ちゃんこと「青海 永梧」 おうみ えいご は流香の二歳離れた二番目の兄であり、もちろん流香と同じく幼なじみの一人である。昔はよく遊んだものだが、永梧が高等部に進学してからは高美とはあまり会わなくなってしまった。

そんな永梧が高美をイルカコミュニケーションに連れて来いとはこれいかに。

「特に、理由もなにも無いと思うんですけど……」

なんだか流香の様子を見ると、無理に来なくてもいいと行ってるように見えた。

「用事が無かったら行ってみようかな？」

高美はとりあえずそういつておいた。

「うん、わかりました。それでは何も無かったら一緒に帰りましょう」

「うん」

二人の間の会話を聞いて、友人の鈴木が顔を突っ込んできた。

「なに！ 男の話し！？ 流香ちゃんの兄貴？ イケてる！」

そんな鈴木的首根っこを捕まえて間弓 まゆみ が鈴木を持ち上げ

た。

「はい、邪魔しないでね」

「なに！ ちょっと、流香ちゃんのお兄さんの話をもっと!？」

「ごめんねうちら」

退場するからと苦笑いを浮かべてジタバタする鈴木を持ち上げて教室の後ろにフェードアウトしていった。

残された高美、流香、南は笑ってそれを見送った。

「まったく、オトコオトコって鈴木には困ったもんだわ。ありやいつか合コン開くって言うよ」

南はため息を吐いてヤレヤレをした。

「うーん、そんなに男の人とお話したいんでしょうか？」

「いや、真面目に聞かなくて良いって。麻疹みたいなもんだから」

ポンと流香の肩に手を置いて、南は首を左右に振った。流香はよく解らず首を傾げた。

あまりにオトコの単語を聞いたせいか。高美は今朝の出来事を思い出していた。

「今朝の人大丈夫かな？」

「それもオトコの話！」

いつの間にかこちらに戻って来ていた鈴木はポツリと言った高美の一言を拾って食い付いてきた。

「ち、ちがうちがう。今朝わたしがぶつかっちゃった人の話！」

高美は慌てて訂正をする。ちゃんと覚えておかないと鈴木はオトコの話になると変な方向に話をねじ曲げてしまう事があるのだ、その為彼女と付き合いの長い間弓が目を光らせてくれているのだが

「その人カツコイイの！」

どうやら間弓の目から掻い潜ってきたようで、そして高美の訂正の半分も鈴木の耳には届いていないようだった。

「うーん、顔はあんまり見てないよ。ええと、頭がボサボサの無造作ヘアーだったのと、制服の下にジャージ着てたのが印象に残ってるかなあ。あ、あと、わたしより背が高い気がする」

あれ、結構見ているなと思いつながら高美は今朝ぶつかった生徒の特徴を並べて言ってみた。

「あゝあ、余計なエサを」

南が額に手を当てて首を振っていた。言われて高美もしまったと口元を押さえた。

だが、時は既に遅しである。瞳を輝かした鈴木がズイツと詰めよってきた。

「その感じ、イケメンの確率高しと見た！ センサー がビビ
つと来た！」

センサー とは、鈴木曰く自分にだけ感じる。イケメン感知能力
らしいが・・・信憑性はかなり低いし、判断基準もよくわか
らないので友人間ではあまり信用していない。

「お願い！ もう少し情報を、主に顔のパーツ関係を！！？」

しかし、本人は自分の直感を信じており、段々とテンションがギア
チェンジの如く上がってくるので始末に終えないのだ。

「うえっ！ そんなこと言われてもよく覚えてないって！？」

さすがの高美もタジタジとなる。

「よく、よく思い出してみよ！ ね！？」

完全に背中と壁がピッタリとなって、ちよつと怖くなってきた。

そのとき

「くおらっ！！！」

「ぬなっ！？」

救世の手が、暴走した鈴木のを羽交い締めにした。

「あたしが目を離れた隙に！ あんたは！！」

「は、離して！ これは指命なんよ！？」

「指命だったら自分でやれ！ 他人を巻き込むな！！」

「そんなの当たり前じゃない。あたしはもっと情報を確実なものにしたいんだい！？」

ジタバタと手足をバタつかせる鈴木をひょいと持ち上げて閻弓は荷物運ぶように後ろに下がる。

「ごめん。今度こそ落ち着くまでちゃんと見張ってるから」

「もー、まゆまゆ の裏切りいいっ！？」

「あたしは誰の味方のつもりはない。あと、人前で まゆまゆ はやめな」

「くっそー、男子の前でそのおっぱい揉んで日焼けの下着跡を見せてやる！」

「やれるもんならやってみな」

「ぐう…… あたしは諦めの悪い女なんだあっつ！！」

「わかったから、外でゆっくり話そうね」

こうして二人は嵐のように去っていった。

「す、鈴木・・・・・・・・怖すぎだよ」

「ほんとに、あのエネルギーは集中した時の高美なみだわ」

「わたし、あんなにパワフルだっけ？」

「うん、割りとマジで」

「ハハハ、まつさかぁ・・・・・・・・ええと」

少し、自分の行動は自重しよう和高美は思った。

そして、放課後。

高美はイルカコミュニケーションに行くと言香に伝える暇が無かった。

なぜなら

「それらしいイケメンは矢神には見当たらないんだけど！　もうちょつと詳しく聞かせて！！」

「だから、イケメンかどうかなんて知らないってばあぁっつ！！？」

第二ラウンドが始まったからだ。

高美は早く校門から出ようとダッシュした。さすがの鈴木も学校の外に出れば諦めてくれるだろうという淡い期待からだった。

全力疾走で高美は自分が負けるとは思って無かった。身体能力には自身があるのだ。伊達に遅刻ぎりぎりと思われる時間に起きて、

いつの間にか優等生クラスの登校時間になるほどの全力疾走をほぼ毎朝行ってはいないのだ。

事実、本当は走ってはいけない廊下を稲妻のような反射神経で障害物を回避し、良い子はやってはいけない階段の一气跳びを駆使し、鈴木をぐんぐんと引き離し校舎を出た。

（やった！ 勝った！）

小さなガッツポーズをして鈴木のしつこさに勝った事を確信した。

だがしかし、アクシデントというものは誰にでも起こるもの。それは高美も例外ではない。

「え？」

なぜだろうか？ 高美の進行方向にサッカーボールがコロコロと転がってくる。

（ちよっ！ まっ！）

声をあげる暇もなかった。

蹴り上げる。そんな芸当ができる余裕はなかった。転がってきたボールを思いきり踏んづけて、高美はグルンと一瞬空を見た。

一瞬、一瞬だった筈だがそれが少し長く感じる錯覚に高美は陥った。空の青さがよく見えた。雲の白さもよく見えた。

そして、それらの間に細く 赤い 光が空から落ちてくるのがよく見えた。

（え？　なにあれ？　隕石？）

一瞬の中の一瞬でそんな感想を頭に過らせると同時に、高美は一回転して顔から地面に落ちた。

「お、おい、やばいぞ！？」

「い、一瞬・・・・・・白」

「言ってる場合かよ！！」

「きゃあぁっ！　高美大丈夫！？」

色んな声が高美の元に心配する声が集まってくる。

だが、高美はそれが遠くから聞こえる気がする。それよりも、高美は空のあの　赤い　光が気になった。

高美は腕を突いて一気に上半身を起こした。うおっ！？　と周りからどよめきが起こるが、高美は急ぎ空を見た。

空には青と白の美しいコントラスト。だが、そこに　赤い　光は見えなかった。

ケガは擦りむき程度で、ケガとも思わないケガだった。体がぶつけた場所が場所だけに、特に高美は女の子であるから周りの人達が

心配するので一応保健室で見てもらった。

特に異常は無いようで赤チンとバンドエイドの応急処置で帰された。

鼻の頭のバンドエイドを鏡で見て間抜けなもんだと思いつつ、高美は空を見た。

あの一瞬だけ見えた　赤い　光の事を考えていた。

あれは見間違いだっただのだろうか？　起き上がった時に、周りの人達に聞いてみたが、そんなのは見ていないと言うのだ。けど、高美は光を見たと何度も言うので、周りの生徒達は本当に大丈夫かと聞いてくる。騒ぎを聞きつけた鈴木は青くなって何度もごめんと言っていた。

高美は大丈夫を繰り返し、その場は保健室に行くことで納めたが、ヘタをしたら救急車を呼ばれていたかも知れないなと高美は笑った。

笑いながら、またあの光の事を考えていた。気になって、気になって、仕方がなかった。なぜここまで気になるのだろう。

「あれ、なんだったんだのかな？　わたしの見た幻？　けど・・・
・・・何か空から落ちてきたなら」

方角的にこの矢神学園の裏にある「夢見高台」　ゆめみたかだいに落ちたはず。こんな近くに落ちたなら自分意外にも誰か気づきそうなものだと思ってしまう。高美は自分の勘を信じてとりあえず行ってみようと思った。　高美は鞆を手にとると真っ直ぐ夢見高台を目指した。

高台に着くと、とても静かで高美意外に人はいなかった。何か

落ちた形跡も見当たらない。

「んゝ、やっぱりわたしの見間違いなのかなあ……………」

何も無いと証明されても高美はまだ納得は出来ていなかった。確かめないと気がすまない性格が、もうちょっと辺りを見てみようという結論に達し、高美は探索を始めようとした。

その時

「ん？」

後ろの木から、何かが茂みに落ちるガサリという音が高美の耳に聞こえた。

急いで茂みに近づき、ガサガサと掻き分けると、高美の目に両手程の大きさの赤い何かが見えた。

「……………鳥？」

それは、まるで 炎 のような綺麗な赤い色をした鳥だった。

2・誕生！ 炎の翼 ヴァルファイアス！！

高美の目の前の 炎 のように赤い鳥はピクリとも動かなかった。

「生きてるかな？」

なんだか心配になって、近づいてみる。

やはり、ピクリとも動く様子は無かった。

「うーん、このままって訳にもいかないよね」

高美は少し迷ってからそつと赤い鳥を両手で包むように収めた。生きてないならどこかに埋めてあげようと思った。こんな綺麗な鳥が、野良犬や猫に食べられてしまうのは、あまりにも不憫だと思ったからだ。

そつと高美は赤い鳥の翼を撫でた。

手の上でピクリと微かに震えるのを感じた。

「よかった！ 生きてる！！」

高美は赤い鳥が反応を示した事に喜んだ。だが、かなり衰弱しているように見える。近くに動物病院はなかったかと高美は頭を巡らしながら走ろうとしたとき

「う………あ」

何か苦しそうな呻き声が耳に届いた。

「え？ 誰かいるの？」

高美は辺りを見回す。かなり近い所で声は聞こえた。まるで、高美の手の中のこの赤い鳥が

「う・・・・・・・・う」

「え？」

一瞬高美は耳を疑った。これは、本当に
「シャ・・・・・・・・ド・・・・・・・・ベルア」

赤い鳥が人の言葉を喋っていた。

「え・・・・・・・・なにこれ！？」

思わず高美はその場に立ち尽くして、赤い鳥を見つめた。
赤い鳥は低く声を漏らし、寝息を起て始めた。

「ど、どうしょ・・・・・・・・」

夜・午後八時 赤星家 「カフェ・ライジングサン」二階 高美
の部屋

「まだ寝てる、かな？」

夕飯を済ませて高美は自分の部屋へと戻った。机の上のダンボールを覗き込む。白い布生地と脱脂綿を敷き詰めたその中で赤い鳥が寝息を立てていた。

結局高美はこの赤い鳥を家に連れて帰って来てしまった。

人の言葉を話すこの鳥を動物病院に連れて行くわけにもいかず、取りあえず自分で保護し、見よう見まねで簡易ベッドを作り、机の卓上ライトを調節して高美なりの応急措置を試みた。相変わらず、起きる気配は無いようだが、たまに脱脂綿をミネラルウォーターで湿らせた物をクチバシに近づけてみる。

変わらずあまり反応は無い。少しだけ開くクチバシにちよつとだけ力を入れて水を搾る。クチバシが濡れ、パクパクと動く。

これを少しずつ高美は繰り返していた。

「うーん、なんて鳥なのかなあ」

鳥類図鑑を片手でパラパラと捲る。どんな種類の鳥かが解ればいまよりもまともな処置ができると思ったのだが、どこにもそれらしい鳥はどこにも載っていないかった。

少し似てるかなと思った 鷹 や 鷲 の可能性も考えてみたが、やはり違うような気が高美はした。そもそも大きさが違うし、色も違う。なんというかこっちはデフォルメされたヌイグルミのような印象が強い。目も閉じられているが開いたらとても大きいのかなと思えた。

（言葉みたいなの話してたから思わず連れて帰っちゃったけど、やっぱり専門家に見せたほうがよかったかなあ……）

よく考えたら言葉を話す鳥なんて自分が思ってるよりも珍しく無いのかも、オウムや九官鳥等は言葉を教えれば同じ言葉を繰り返すと言うしテレビの投稿番組では歌を歌うカラスというのを見たことがあるし……。

そう考えてから高美はいいやと頭を振る。やっぱりこの鳥とそれらの鳥はなにか違う気がした、赤い鳥は人の声を漏らしていたと思うのだ。他の鳥のようなしゃがれた音ではなくてもっとはつきりとした大人の男性の発する音で。

「……………うん、そんなことあるのかなあ」

もしかして、あの時聞いたのは自分の空耳なのでは？ そちらのほうで納得できるのだが……………。

「まあ、それはこの子が目を覚ましてからでもいいよね」
高美は考えるのを止めた。なんだか頭が痛くなってきたからだ。それよりも今を考えよう。

「そういえば、この子はなにを食べるのかな？」

鳥の食べるものといえば

芋虫……………ミミズ……………。

「う、え……………ペットショップの鳥のエサでいいよね？」

これも考えるのを止めた。高美は自分で真っ先に思いついた物を想像して少し気持ち悪くなってしまった。

「それにしても……………起きないなあ」

もしかしたらこのまま起きないで……と心配になってくる。
あの時、翼を撫でたあとはまったく声を発しなくなってしまった。
あの時この赤い鳥は少しだけ意識を取り出していたように思う。なにをしたらああなっただろうか？ 高美は何気なく自分の手を見た。

（まさかね……………）

あの時そつと翼を撫でたから？ それはあまりにも現実離れしている。

けど、この赤い鳥の存在が既に現実離れしているのではないだろうか？

「えつと……………物は試し……………よね？」

高美は側にあつたミネラルウォーターを一口、ゴクリと喉を鳴らして飲み込み喉を湿らすと恐る恐る右手を赤い鳥の翼に這わすと。そつと、なぞるように撫でた。

「……………」

……………。

……………。

特に、変化は無かった。

「や、やっぱりねえ」。こんだけでなにか起きたら 魔法 だも

ん」

少し期待をしていなかったと言えは嘘になるが、やはりそんなことで起きるわけは無いという現実感がちよつとだけ高美の心を安堵させる。

「あ、もう九時になるんだ。そろそろ寝る準備しておかないと」

明日こそはゆつくりとした登校にしたい。愛用の目覚まし時計と携帯の目覚ましアラームをセットしようと高美は手を伸ばした

「・・・・・・・・む・・・・・・・・う」

「・・・・・・・・え!？」

呻き声のようなものを聞いて高美は動きを止めた。

「お・・・・・・・・う」

間違いなく聞こえた。男性のような呻き声、目の前から聞こえる。高美はガバツと顔を赤い鳥へと近づけた。目を丸くして、無意識に吐息をはいていた。せの吐息が赤い鳥の顔をくすぐった。

そして、赤い鳥がゆつくりと目を開いた。

アニメ漫画のように大きな瞳を開いた。その瞳に燃え盛る 炎が吹き出したように高美は見えた。同時に体の奥がカツと熱くなつた気がした。

「!?!？」

高美は迫ってくる炎の錯覚から逃れようと後ろに仰け反り

「え・・・・・・・・きゃっ!？」

バランスを崩して椅子ごと床に思いきり倒れてしまった。

目をパチパチと瞬かせ、高美は呆然とした。体の痛みなど感じなかった。

ぼうつとした瞳に真上のダンボール箱から何かが顔を覗かせる。

「・・・・・・・・すまない」

それはあの赤い鳥。男性的な低音で彼ははつきりと人の言葉でこう言った。

「なにか、食べるものは無いだろうか？」

「・・・・・・・・はい」

高美は呆けたまま応えた。

「あの、こんなのしか」

高美はベッドの横のお菓子用の小物入れの中にひとつだけあった袋を開け、中身をひとつふたつ手の上に乗せて赤い鳥に差し出した。

「か、かりかり小梅 食べれる？」

鳥がかりかり小梅を食べるなど聞いたこともないと思いながら差し出したわけだが

「ふむ、初めて見るが……………」

赤い鳥は少しの間かりかり小梅を見つめると、パクリとひとつ口にした。カリカリとしばらく音を起てて食す。

（歯も無いのにどうやって噛んでんのかな？）

と、高美は思いながら赤い鳥を見つめる。

赤い鳥がコクリと喉を鳴らすような動きをすると高美を見る（アニメのように大きな瞳に先ほどの 炎 は灯っていなかった） 彼は目を優しく細めて高美に頭を下げた。

「ありがとう。とても美味しい木の実だ。こんな木の実は初めて食べた」

「あ、いえ、こちらこそお粗末な物を……………」

高美はなんだか不思議な気分だ。普通に鳥と話してかりかり小梅をごちそうしている。驚く暇も無いというか、驚きは既に通り越している気がする。彼？ が妙に落ちついた男性的な声のせいだろうか？

「いや、お粗末などとてもないな。程よい固さと酸味はワタシの中の木の実の常識を覆された」

（木の実……………）

確かに、原材料は木になる実なのだが……………。

「？　なんだか難しい顔をしているね？　ワタシはなにかまずいことを言ったのかな？」

「うっん、なんでもない！？」

切なげな上目遣いで首を傾げる彼？　の仕種がとても愛らしくて、少しキュンとなったので、そんな事はどうでもよくなった。

「ぜ、全部食べて良いよ！？　かりかり小梅！？」

「ああ、ありがたくいただくよ」

彼？　は目で微笑み、高美の手に盛られたかりかり小梅をしばらく食し始めた。

（うっん、なんか動いてる姿を見れば見るほど）

完全に普通の鳥で無いことが解る。言葉を話すこともそうだが、動いている姿は精巧なヌイグルミが生きているようであるで教育テレビのアニメのようだ。

彼？　は何者なのだろう？　鳥の姿をした人？　人の心を持った鳥？　唯一わかるのは彼？　が悪いものでは無いということだった。

やがて、彼？　は満足したのか食事を終わると再び高美の目を見て

「君は、ワタシを救ってくれたようだね。改めて礼を言つよ。ありがとう」

頭を下げた。高美は少しこそばゆい気分だった。自分ではそんなに

大したことをしたとは思ったからだ。

彼？ は頭を上げると目で優しく微笑みながら片翼を自身の胸に当てた。

「ワタシの名は「ホーク・マスター」恩人である君には名乗って置きたい。 ホーク と呼んでくれ」

彼？ ホークは自身の名を高美に告げた。 その名を聞いた高美は。

「え、ほおく？ てことは、貴方はやっぱり鷹や鷲の仲間なの？」
妙な所で反応していた。

「タカ？ ワシ？ いや、ワタシの仲間にそんな名前の者はいないが？」

ホークはいきなりの事に目をパチパチと瞬かした。 その姿が妙におかしくて高美は少し吹き出してしまう。

「やはりワタシはなにかおかしいことを言ったのだろうか？」

ホークは胸に翼を当てた常態で首を傾げる。

「あ、ごめんなさい。 あのね、きみがこの動物に似てる気がするね。 君と同じホークって呼ぶ国もあるの」

そういつてホークに鳥類図鑑の鷹のページを見せた。 ホークは思案顔でそれを眺める。

「ワタシは、こんな恐ろしげな表情をしているのか？」

「ううん、どつちかというとかワイイかなきみのほうは。あ、わたしの名前にも字は違うけど たか は付いてるよ。なんかいきなりばいけどわたしは高美。赤星 高美」

「アカボシ……タカミ？ うん、憶えておこう」

「けど、カワイイよりもきみの声はイケメンだね。アニメの声優さんが吹き替えてるみたいな」

「イケメン？ アニメ？ セイユウ？ フキカエ？ なんだ、知らない言葉が次々と………会話は問題ない筈なのに。それらはいったいどういう意味を持つ言葉なんだい？」

「え、ええと、意味は………」

高美はひとつひとつの言葉の意味をしどろもどろにホークに教えた。

「ふむ、つまりこれがイケメンという類いに分類する種族というものかい？」

「うん、そうだよ。人によって違いはあると思うけど」

高美は雑誌の特集ページを使って イケメン についてホークに教えた。ややずれた感覚で納得しているようにも思えるが。

「ところでタカミ。なぜこのイケメンは腰元にベルトのような物を巻いているんだい？　あまりにも不自然に思えるのだが？」

ホークが不思議そうに特集ページを覗き込む。

「ベルトって言葉は通じるんだ。えっとね、この人は変身ヒーロー物でブレイクした役者さんで」

「変身、ヒーローモノ？」

「うん、これはちょうど変身途中の写真」

「……………このベルトの意味は？」

「えっと、だからそれは変身に必要なアイテムで……………それでこうバシッ！と無敵のヒーローに変身できちゃうのよ」

「無敵に、変身」

「うん。けど、ドラマの中でただだよ？」

「なるほど……………彼もこの世界の　勇者　なんだね」

「ええと、ドラマ。作り話……………わかってんかなあ」

高美は説明にドツと疲れて、ミネラルウォーターを喉を鳴らして飲みながらホークを見た。

「……………あれ？」

高美は自分の目を擦った。

「どうしたんだい？」

ホークが不思議そうに覗き込む。

「う、うん、ちょっときみの目が」

火が燃えているように見えて

「……………なんだって」

「ちょっと疲れてるのかな。さっききみが目を覚ました時もそんな気がしたんだけど……………きつと気のせいだと」

「タカミ……………キミは 炎が見えるのかい？」

「え？」

「だとすれば、キミはとても心の 炎が強いんだな」

「ええつと……………」

ホークの言っている意味が高美にはよく解らなかった。

「ああ、すまない。よくわからないようだね。そうだね、心の炎とは——」

ホークは高美に心の 炎について教えた。

「人は誰しも心に強い何かを持っているんだ。そのひとつが心の炎 真っ直ぐな心に反応して生まれる熱い力。普通は見えないものだけだね」

「うん……つまりはどういうことなの？」

「そうだね。簡単にすると、体の力は限界と思っているけど心はま дайけるはずだと真っ直ぐに思うことで体に振り絞った力が上乘せ されるものかな？」

「それって、底力の事？」

ホークの説明で高美が想像したのは 火事場の底力。これなら自分にあってもおかしくなかった。なにしろ毎朝の全力疾走で底力は出しまくっているのだ。

「ソコチカラ？ この 世界 では 炎 の事をそう言うのかい？」

「うん、だと思っけど……ん？」

ホークの言葉を聞いて高美はあれ？ と思った。

この 世界 ？

「ねえ、きみ、ホークはどこから来たの？」

ホークと話していると彼はとても人間のように思えた。この 世界 というホークの言葉をそのままの意味で取るならば

「ワタシは、 エレメンテ ということとは違う別世界から来たんだ」

やはりホークは別の世界から来たようだ。

「へー、じゃあホークは異世界人？ ん、異世界鳥？ なのかな？」

「あまり、驚かないんだね？」

「うん、逆に納得できてスッキリ。というか、ホークを見た時のインパクトと比べたら今さら過ぎるかなって思っちゃって、うん」

「そんなにワタシの姿は、この世界ではおかしいのかい？」

「ホークみたいに人とまったく同じに話ができる鳥はいないかな？」

「そうか、ならワタシはこれから気をつけなければいけないな。ワタシの パートナー が見つければ話はまた違うのだが……」

ホークは急に真面目な色を瞳に宿し、なにか呟いた。

「ね、 パートナー てなに？」

興味が湧き、高美は椅子に座り直して少しワクワクする気持ちでホークを見た。

「うん？ ああ、そうだね、恩人であるタカミには話してもいいかも知れないな」

ホークも翼を畳み直してから高美に話し始めた。

「ワタシが エレメンテ から別の世界に来たのは、ある目的のために仲間と共に パートナー を探しに来たんだよ」

「仲間って、ホークの他にも鳥みたいな姿のひと、とり？ がいるの？」

そういえばホークは最初、なにか言葉を呟いていた。あの言葉はもしかしたら仲間の名前だったのかも知れないと高美は思った。

「いや、彼らとは種族は近い存在だが、ワタシとは全く違う外見だよ。彼らにはワタシのような翼は無いし、ワタシにも彼らのようなセビレ や 毛皮 は存在しない」

高美はホークの仲間をなんとなく カジキマグロ とモコモコモの羊 を想像した。少し、ホークの姿よりもカワイイイメージで。

「ワタシは 炎 のパートナーを探しているんだ。彼らはまた違うパートナーをね」

「 炎 のパートナー？」

「そう、タカミのように心に 炎 を宿らしたパートナーをね。強い心の 炎 を持つ人はワタシの中の 炎 を視認する事ができるんだ。さっきのタカミのようにね」

「わお、なんか凄そうな話だ。そういう人はいっぱいいるんだ」

「いや、炎を視認できたのはタカミが初めてだ。炎を持つ人はたくさんいるが、強い心の炎は一握りのひとだけだ。だからワタシの幸先は良いのかもね」

「え？　もしかしてわたしがホークのパートナーとか!？」

驚いて高美は自分を指差す。だが、ホークは首を横に振った。

「残念だが、タカミはワタシの求める炎を持っているわけじゃないんだ。ワタシが求めるのはもっと強い炎。そうでないとワタシの使命に意味が無くなるんだ」

ホークは神妙な面持ちで語ったあと、にこやかな瞳で翼を広げた。

「さて、ワタシはそろそろ行かなければ。助けてくれて本当にありがとう。感謝している」

「え？　行くって、どこに行くの？　まだ休んでたほうが良いよ!」

「ありがとう。でも、あまりのんびりもしてはいられないんだ。もしかしたらワタシの求める炎はこの世界にはないかも知れないからね」

「そう、なの?」

「ああ、可能性が強いただけだね。それに、仲間との合流もなるべく急ぎたい。タカミ、キミとキミの世界の幸せを願うよ」

そう言い残し、ホークは暗闇の夜に赤い体を溶け込み去っていった。

「あ……ホーク、大丈夫かな」

その少しだけよろけたように見えた背中を窓から高美はしばらく見つめていた。

時刻はもう十一時に近かった。

翌朝――

「やっぱりほっとけない」

高美は意を決してベッドから飛び起きた。結局ホークの事が気になつて一睡もできなかった。

今は朝の六時。今から捜しに行けば学校を遅刻することもないはずだ。ギリギリまで粘ってみよう。決意を胸に着替えを済ませる。あまりにも早く起きすぎて両親に驚かれたが、なんとか適当に掃除当番を忘れてたと言つて納得させた。

昼はさすがに弁当が間に合わないのでパンを買うことにして家を出た。

「ホーク・・・・・・・・いるかな？」

とりあえず高美はホークを見つけた夢見高台へとやってきた。必ずいるとは思えなかったが、闇雲に捜すよりはマシだと思って来たのだが。

「うん、いないなあ。ホーク？ いるなら返事して」

茂みや木の上、空を見上げても見たが、ホークの姿は見えなかった。それどころか、自分以外は誰もいなかった。

「はあ、もうちょっと捜してから、他の場所を捜そうかなあ。ホーク、いないのー!!」

大きな声で叫んでみたけど、やはり返事は無かった。

「むう」

ここにいらなくて残念だなとちょっとだけ唇を尖らせた時。

「ねー、キミー、誰か捜しているのー」

高美の背後で声がした。誰もいないと思っていたから高美は驚いて後ろを振り返った。

（え・・・・・・・・!？）

その声の主を見て高美はゾクリと寒気がした。

そこにはひとりの男が立っていた。親切そうな、人懐こそうな笑顔を作って高美を見ていた。その口元には紫色のメイクが施され、余計につり上がって見えた。顔付きはとても端正な顔付きなのかも知れないが高美には解らなかった。口元のメイクと、白粉を塗りたくったような顔の白さがそれを隠していた。

その体は作り物のように細かった。腕も、足も、腰の括れも、不気味なほどに細かった。その着ている服は真っ黒でサーカスのピエロのような服で、足元の靴はブカブカでまるで遙か昔の喜劇王のようで、ヨレヨレに折れ曲がっていた。

そして、毒々しく脱色された長い長髪の奥から覗く黒すぎる目は、とても笑っているようには見えなかった。

そんな男が、とても明るい声で高美に話し掛けてきた。とても、妖しく、不気味で、高美は体に恐怖を感じて声が出なかった。

「よかったらボクも一緒に捜そうかー」

男はなおも話しかけてくる。口元はますます裂けるように笑みを浮かべる。

怖い。後退り、なんとか一言の声を絞り出せた。

「い……………いです……………自分で、捜す」

「そーかー、だったらさー、ボクも捜しものがあるんだー。一緒に、捜してくれるー」

「え……………あの」

男は高美の返事を聞かずに、手で特徴を表す。

「これぐらいのー、赤い鳥。知らない？ 青いの。知らない？
緑色。知らない？」

「！！？」

（ホークだ。この人、ホークを探してるんだ！？）

「あれー、もしかしてー、知ってるー」

「し、知らないです！？」

言うてはいけない。この人にホークの事を話してはいけない。一歩
後ろに下がる。

「えー、嘘だねーそれ、その顔は知ってる顔だよー」

だが、男はズイツと近付いてくる。端から高美の言葉を信じてい
なかった。

「ねー、知ってるでしょ？ ねー、ねー、ねー」

「ほんとに、知らない！！？」

怖い、怖い、怖い。

「素直になろーよー。教えてくれたらー……………酷いことし
ないから」

急に男の顔から笑顔が消え、高美の腕を素早く掴んだ。

逃げられない。手が氷のように冷たい。この人は人間じゃない。
怖い、怖い！？

「い、いや、は、はなし」

「強情な子。痛いことしたら、素直になるかな？」

男は軽く高美の腕を上につ張った。

「！！！？ い、やだあああつつつ！！！！？」

弾かれたように悲鳴を挙げて、高美はその手から逃れようと暴れる。

「あ、はははー。いい悲鳴だなー。ね、もっと怖がって泣いてみて、
ボクをゾクツとさせて？」

「やめ、やめてよ！？ 放して！ やだ、やだ！！？」

「だ・あ・めー」

助けて！ 誰か助けて！！？ 怖い、怖いよ！！！！？

高美の助けを求める声は誰にも届かない。目の前の不気味な男を喜ばせるだけだった。少しずつ男が力を強めてくる。楽しそうな笑みを浮かべたままで。

高美は叫び続けるしかなかった。それが、この男をますます喜ば

せる事になつても、それから逃れる方法はそれしか無かつた。

高美の願いは、届かないのか？ 彼女を助ける者は？

ヒュンと高美の涙に濡れた目に、赤い何かが映つた。燃える 炎の塊が弾丸のように飛び出し、男と高美を引き離した。

彼女の助けは現れたのだ。

高美を護るように小さくも赤い存在が彼女の目の前に降臨する。

「ほ・・・・・・・・・・ホーク」

その存在の名は ホーク・マスター 力強き、異界の赤鳥。

「ワタシの恩人にこれ以上触れなくてもらおう！！」

ホークは怒りに燃える瞳で目の前の男を威嚇する。

「いつたいない。虫に刺されたみたいに痛い」

男は手をブラブラと揺らしながら立ち上がり、不気味に口の両端を上げる。とても嬉しそうに。

「やー、また会えて嬉しいない。 炎 の 守護 の 勇者 さん」

「ワタシは二度と会いたくはなかった！ アプテムの悪魔！！」

ホークは男の言葉を自身の言葉で一蹴した。

「ひどいなー。前に名乗ったじゃないか。ボクの名は ワーレ
アプテムの使徒さ」

「憶えるつもりはない！」

「えー、いいーけどさー。相変わらずなにか企んでんのー、君達、
無駄なんだよねー」

「貴様に何がわかる！！ ワタシ達の使命を無駄だとは言わせない
！！」

「ふーん、でもー、それもここで倒れたらおーわーりでしょ」

男は楽しそうな笑顔で 真っ黒な宝石 を毒々しい髪の中から取り
出した。

「この世界さー。初めて来たときボク達 アプテム が手を降す
価値無いなーて思ったけどー」

更に手元から空き缶を取り出す。

「これだけ 汚れ が充満してるなら、 牧場 目当てで侵略す
るのもいいってさー！！」

その 真っ黒な宝石 を空き缶に「飲み込ませ」叫んだ。

——アープモーンズ!!

ワレの叫びと共に、禍々しい黒の光が辺りを包み、一瞬にして目の前に巨大な空き缶に似た怪獣を生み出した。

『ガーンゴロガーン!!』

「はははー、今の君達程度ならー、ボクが手を降すまでもないんだよねーこの世界はさー!!」 ゴミの汚れで終わっちゃいなよ 炎の 守護 ー!!」

ワレの叫びと同時に空き缶の怪獣 ガンゴロガー が動き出した
!!

「タカミ! 逃げてくれ!!」

「.....え?」

「ワタシが食い止めているうちにはやく!!」

ホークは腰を抜かしている高美に激を飛ばし、自らは 炎 の塊となりガンゴロガーに立ち向かっていった。

「ホーク!!?」

高美の叫びは激突音と共に掻き消された。

ホークの 炎 とガンゴロガーの巨大な腕が何度もぶつかり合う。

ホークの行動は全ては高美を逃がすための行動だった。

高美にもそれがわかっていた。だから、この場から離れないといけない。それはわかっているのに、足に力が入らなかった。腰が抜けて、その場から動けない。

（ホークが、ホークが頑張ってくれているのに……）
「く、タカミ！！」

「よそ見ーダメだね！！」

『ガーンゴロガーン！！』

動けずにいる高美に気を取られた瞬間をワレに突かれた。あまりにも呆気なくホークはガンゴロガーの腕に捕まってしまった。

「ホーク！？」

「く、ああ」

捕まったホークを見て高美は叫ぶ。ホークは苦しそうな呻き声を上げる。

「ははー、あつけないなー」

ワレが更に醜い笑みを作りながらガンゴロガーの腕の中のホークを眺めながら馬鹿にした視線を向ける。

「キミもバカだなー。 炎 の 守護 あんな弱い人間のためにさー、使命を果たせなくなっちゃったねー」

「黙れ、タカミは弱くは無い。貴様になにが、わかる」

「えー、弱いよー、あれ。ちょっと力入れただけで泣きじゃくってさー、思わずゾクゾクしてさーもっともっといじめたくなっさー本当に弱くてさー!!」

「そのふざけた口を閉じろ!! それ以上のタカミへの侮辱は許さない!!」

「なんだよー、マジになっちゃってー、ヒヒハー、そんなにあれが大事ならさー」

怒りをぶつけるホークの言葉に口の端をピクピクと揺らし目でガンゴロガーに合図する。ホークを掴んだ腕をガンゴロガーが振り上げる。

「!!!? 何をするつもりだ! よせ!?!」

「仲良く潰れなよー!!」

『ガーン!!』

高美に向かって降り下ろした。

鈍く叩きつける音と砂煙が辺りを包んだ。

「……………わたし」

高美は無事だった。あのぶつかる激音の中で砂煙の中。無事だった。あの時、確かに高美に向かってホークを投げつけていた。

だが、そのホークが力を振り絞り、炎の力で彼女を包み護ったのだ。自分の事はかえりみずに。

「ホーク!!」

高美は地面に叩きつけられたホークにしっかりとした足で駆け寄り、彼を胸の中で強く抱きしめた。

「無事………かい？ タカミ」

「ごめん………ごめんなさい！ わたしのせいで」

「タカミのではない………これは、ワタシの問題だから」

「けど!! わたしが………わたしが」

「大丈夫………ワタシがタカミをここから救うよ………そして、また使命を」

「ダメ！ しっかりしてよホーク!!」

息も絶え絶えとなったホークは高美を安心させようと必死だった。

「タカミを………救い………この場を打開する………
………ほう………ほう」

この場からタカミを救い出す方法。ホークは呟き続ける。

「なんだー、両方ともしぶといなー」

ワレが醜い笑みを張り付かせ近付いてくる。虫の息のホークを自分の手で始末するために来たのだ。

「さ、それをこつちによこしてー」

「・・・・・・・・」

「聞こえないのー、ねー、ねー」

「・・・・・・・・さない」

「えー、なにー」

「絶対に・・・・・・・・」

高美の両手に力が籠るのをホークは感じていた。とても暖かで真っ直ぐな力を

「ホークはあんたなんかに渡さない!!」

高美の中でなにかが爆発した。これは怒り、憎しみではない純粹な怒りだ。その怒りは、高美の底の力となる。恐怖を塗り潰すより強い炎の力となる。

ホークもその炎を胸の中で感じていた。そして、ここから抜け出す打開策が生まれる。

（この炎の強さなら!!）

「タカミ・・・・・・・・一時的でいい・・・・・・・・ワタシの力になっ

てくれ」

「え・・・・・・・・うん!!」

高美は一瞬だけ考え、ホークを信じた。

「よし・・・・・・・・いくぞ!!」

ホークの瞳に燃え盛る炎が宿り、それが体の全体を包み込む。

——ファイ・ガードセット!!

高美の頭に反響するホークの声が響き、炎が高美の腰に巻き付くような動きをみせる。

「な、なに!!」

その炎の圧力にワレが吹き飛ばされ、離れた所に着地する。

「な、なにが!？」

ワレは目の前で炎に包まれる少女の変化を目撃する。

高美の腰の炎が消えると、彼女の腰にベルトが巻かれていた。それは中央部が赤い鳥を模した宝石のような物が嵌め込まれていた。これはまるで、あのホークと一緒に見た雑誌のヒーロー俳優が着けている物に似ていた。

(タカミ)

頭の中でホークの声が反響し、高美の目の前に 炎 の渦が現れ、そこから赤く燃え上がるカードが出現する。

（ 炎 のカード。ワタシの力を託す！ 受け取ってくれ！）
高美は頷き、目の前のカードを握る。

（後は頭に流れるままに動き、唱えるんだタカミ！！）

目を閉じ、頭の中に流れる言葉を高美は読み取り、ベルトの中央部にカードをスライドさせ唱えた。

——ヴァル・ガードアップ！ 炎 のエレメス！！

カードはより強く燃え盛る 炎 となり高美の身体を包み込んでゆく。そして高美は踊るように身体を回転させる。腕に包まれた 炎 が赤いドレスとなる。

足に包まれた 炎 が赤いスカートドレスとなる。

体に包まれた 炎 も赤いドレスとなる。赤いオーラドレス。 炎 のエレメスが彼女の鎧となる。

燃え飛ぶ 炎 が髪に触れ、高美のポニーテールを燃え輝く赤色へと変え、 炎 のチークが唇を艶めきに焦がし、美しい紅となる。 炎 のシャドーが麗しく焦がし、凛々しきアイシャドーとなる。

そして最後の 炎 が瞳に触れ、 ルビー のような華麗な 紅へと生まれ変わる。

全ての 炎 に身を包み、変身は完了し、ここに 炎 の 守護

の 乙女 が誕生した。

その名は

—— 天空 に羽ばたく 炎 の翼！ 燃え上がる 守護 の 乙女 ！ ヴァルファイアス ！！

力強い瞳を目の前の悪意へと向ける。その瞳にもはや恐怖に濡れた涙はない。悔しさを滲ませた涙はない。今の彼女の身を包むのは学校の制服ではない。胸元のタイという特徴を残し生まれ変わった赤き 炎 を現すフレアのオーラドレス。燃える 炎 のエレメスが今の彼女の鎧。

そして、彼女の胸に宿る熱き 勇気 の力。自分と一心同体となつた心強き 炎

もはやさつきまでののか弱い 少女 ではない。強く拳を握り固めるいまの彼女は 炎 の 守護 の 乙女 ヴァルファイアス だ。

—— いくぞ！ タカミ！！——

「うんっ！！」

意志の同調と共に高美は、ホークは、 ヴァルファイアス は、熱き熱風となり、目の前の悪意にぶつかっていった。

「ヴァルファイアスだって？」

そうか、これがボク達に抗うための小細工か。だけどー、所詮は弱

いものを取り込んだだけの無駄な力だねー。

ワールは目の前で生まれ変わった少女の力強い瞳を前にして、そんな感想を持った。ボクのアープ・モンスターに敵うわけがない。捻り潰してまた泣かしてあげるよ。

しかし、この自身の中の余裕が

「ヤアアアアッ！！」

ヴァルファイアスの渾身の体当たりにより一気に崩れ去ることになる。

『ゴガアア~~~~！！？』

ガンゴロガーが後ろに吹き飛ばされる。ワールもそれに巻き込まれる形となった。

「な、なんだこれは！？」

弱いはずの相手の一撃が強いなんて有り得ない。これは間違いだ。

「ダメじゃないか！！ 弱いくせに！！」

ガンゴロガーが態勢を立て直し、再びヴァルファイアス目掛けて腕を降り降ろす。

（潰してやる今度こそ！！？）

だが、ワールの願いは叶わない。巨大な腕を片手で受け止めるヴァ

ルファイアスの姿をその目に映したのだ。

——ワタシたちが弱いかな？——

「そんなこと、もう言わせない」

ヴァルファイアスが腰を落とし、空いた片方の拳を強く固める。

——タカミの 炎 が——

「ホークの 炎 が」

——弱いはず——

「あるもんかあああつつつ！！！！」

叫びと共にヴァルファイアスの正拳が真上に叩き込まれた。それは超高熱の弾丸と呼べる一撃。何倍もある巨大な腕が破裂する。

『ガガガガ！！！！！？』

衝撃と共にガンゴロガーの巨体が揺らぎ、後ろへと倒れ込んだ。

「なにやってんだよ！ それは飾りか！！ 倒すんだよ！！ あれを倒すんだ！！？」

ワレの怒声にガンゴロガーは腕に装備された巨大な缶のプルトップを解放し、ヴァルファイアスに向かってオレンジ色の液体を噴射する。

それをヴァルファイアスは空中で後方に回転し回避する。

避けた液体が地面を溶かす。この液体の正体は溶解液だった。

ヴァルファイアスの着地と同時に再び溶解液が噴射される。だがヴァルファイアスはこれを避けて真正面から突っ込んだ。

——タカミ！——

ホークの声と共にヴァルファイアスはタイの上に両手をクロスさせる。

——解き放て！——

「フレムカーテン！！」

瞬時の両手の開放と同時に 炎 の帯が目の前に広がる。それはまさに 炎 のカーテンだ。溶解液は瞬時に蒸発し、 炎 の帯が溶解液を発射する缶へと道を作る。ヴァルファイアスが飛翔する。

「タアアアツツ！！」

縦回転の高熱の蹴りがこれを粉碎した。

『ガアア~~~~！！？』

ガンゴロガーの巨体が再び転がり、ヴァルファイアスは着地し、ベルト部に手を添え構えを取る。

——一気に決めるんだ！——

「うん！これで！！」

——ファイ ガードターン！

ベルト部を押し、回転させた。

——オン ブーステック！！

再びヴァルファイアスの周りに 炎 が展開し、エレメスのスカート一部分と両袖を燃え上がらせ、焼き消した。スカートはヴァルファイアスの脚を完全に露出させる程の短さになり、腕も完全に露となる。

燃え上がった 炎 がベルトに集まる。ヴァルファイアスはベルトの前に両手を翳し、握るような形を取る。そして

「ファイアースオード！！」

燃え煌めく 炎 の赤き大剣を召喚した！

「はあっ！！」

地面を蹴り、飛び上がる。 炎 の大剣 ファイアースオードを振り上げ、目指す敵へと降下する。

——一撃の 炎 豪断！！——

「ファイアス・ラスター！！！！」

降り降ろされた 炎 の一撃はガンゴガーの巨大を両断し、完全に消滅させた。

燃え散った 炎 が輝き、辺りに飛び散り、戦いの跡を消滅させ

た。

「く、は、ハハハ」

残されたワールは渴いた笑いを挙げて、大地に降り立ったヴァルファイアスを睨み付ける。

「こんなことがー、まぐれがー、続くわけがー無いんだよねー」

口調を戻し、だが顔の両端は引き吊らせたまま、この結果を素直に認めようとはしなかった。そんなワールの顔をヴァルファイアスは黙って力強い眼差しをぶつけた。それはとてつもない存在感を持っていた。

ワールは軽く舌打ちをして

「いいよー、その顔をまた歪めさせてあげる。悲鳴を挙げさせてやる。それまでー、じっくりと待つがいいさー!!」

そして、自身の影に溶け込み、ワールの気配は消えた。

気配が消えたと同時に、ヴァルファイアスは表情を崩し、その場にへたりこんだ。

「……………や、やった」

今更なからに、体の震えが戻っていた。

——ありがとう。タカミ——

赤い輝きと共に、ヴァルファイアスから高美とホークは元の姿に戻った。

「ホーク！ 怖かったよー！！？」

高美はホークを抱きしめ、糸が切れたように泣きじゃくった。ホークは優しく目を細め、その涙を受け止めた。

「よく、頑張ってくれた。タカミの勇気が、やつの闇を打ち負かせたんだ」

しばらく泣きじゃくり、高美が落ち着くとホークは高美の腕の中から離れた。

「それじゃ、タカミ。今度こそ本当にさよならだ」

その言葉に、高美は慌てた。

「ちょっと待って！ ホーク、どうしてさよならなのー！！」

「あの夜に話したように、ワタシには使命があるんだ。仲間との合流もしなくてはいけない」

「その使命って、さっきみたいな怪物をやっつける力を見つけることだよ！ だったらわたしがもういるよ！！ 使命のひとつは果たせてるじゃない！！」

「さっきのヴァルファイアスの力は一時的な処置だ………完全じゃない」

「でも、さっきみたいな怪物がまたホークを襲いに来るんでしょ？
だったら、戦いの保険はかけておこうよー!!」

「ダメだ！ タカミの身が危なくなる！！ それにワタシは、タカミを保険に使いたくはない」

「大丈夫！ わたしなら大丈夫だから！！ 怖くても頑張れるから
!!」

「タカミ……なぜきみは」

「心配なんだよホークの事が！！ 会ってそんなに経ってないけど、
ホークは友達だもん！ ホーク、身体ボロボロだってさっきの心を
ひとつにした時わかつちゃったもん!!」

「……」

「お願いだよホーク。わたしを頼ってよ……」

ホークは高美の心が嬉しかった。だからこそ、彼女をこれ以上危険
な目に遇わせたくはなかった。

「……タカミ」

だが、ホークは自分は愚かだと思いながら

「……ありがとう」

彼女の優しさに甘えてしまった。これから高美に降りかかる数々の

恐怖をわかつていながら。
だが、高美は

「ホーク!!」

彼の決断が嬉しくて、彼を強く抱き締めていた。

（これでは、いけないのに。ああ、 シャード こんなワタシを
みたらお前は笑うだろうね。だけど、ああ、だけど、せめてお前と
ベルア を見つけるまではワタシを彼女と共にいさせてくれ。全
力でこの娘を護るから……）

ホークが決意を胸にし、どれくらいの時間が起っただろうか？ ふ
と何気に高美は近くの時計を見て

「う、うわあっ!!」

高美は青くなった。

「どうしたタカミ!？」

高美の声にホークが驚いて顔を上げる。

「ち、ち、ち」

「ち？」

「遅刻！ 学校に遅刻する!？」

高美はホークを抱き抱えたまま駆け出していた。

「タカミ！ 落ち着くんだ！？ ワタシを学校に運んではまずい
のでは！」

「うあああん！？」

「聞いていないか……仕方ない。この世界の学生とやらが
持っていても問題が無さそうなのは」

ホークは高美の腕の中で 炎 となり、赤い鳥がデザインされた少
しオシャレなブローチへと変化した。

——これで一緒にいても問題ないだろう。しかし……——
「遅刻だけはダメなおおっ！？」

——あの鞆も持って行かなければ、まずいのではないだろうか・
・・——

夢見高台に鞆が残され、高美は腕にホークを抱いたままの形で全力
疾走をしていた。

——これは………止められん——

ホークは心の冷や汗を掻きながら。今日の彼女の一日が平穩無事に
終わるように祈った。

ホークの祈りが届くかは誰にも解らないが、遅刻よりも大変な高
美の一日が始まる事に変わりはないさそうである。

2・誕生！ 炎の翼 ヴァルファイアス！！（後書き）

なぜか、短くしようとしたら一番長くなってしまいました。

凄く暴走した気がするんですが楽しんでもらえたでしょうか？

次回は 水 の話でいこうかと思ってます。

3・青海 流香 の好きなひと

少女は水の中にいた。沈むこともない、浮かぶこともない。ただ、水の中にいるのだ。

視界はボンヤリとしていて頬を自分の長い黒髪が擦っている。少女は特に今の自分の状態が不自然だとは思わず。ただ、流れに身を任せ続ける。なんだか、色々ともうでもよい気分だった。何も考えたくはなかった。

だが、少女のどうでもよいという気分はひとつの 青い光 によって、突然に終わりを告げる。

なんだろうと思う好奇心が、少女のぼんやりとした視界をパツとはつきりとさせる。

同時に、少女は目を覚ました。

少女はそれが夢だと気付くのにしばらく時間が掛かった。

薄暗い見覚えのある自分の部屋。寝汗を掻いていたのか頬に自分の髪が貼りついていて。お気に入りの淡い水玉模様のパジャマもぐっしりと濡れていた。

これは着替えないと寝られそうにない。

少女はベッドから降りて、タンスから替えの下着とランニングシャツを取り出し、寝汗を拭くためにバスタオルを取りに洗面所へと向かった。本当はお風呂にでも入りたかったところだが、さすがに近所迷惑。我慢をすることにする。

洗面所に到着し、バスタオルを確保。そのままパジャマを脱いで体を拭いていた時、何か違和感に気付いた。ドアひとつ隔てたバスルームからチャポンと浴槽に水が溜まっているような音がする。おかしい。お風呂は最後に兄が抜いたはずだった。

少女は少し怖かったが、若干の好奇心に勝てず、バスタオルで体を隠しながら、そっとドアノブを回し、バスルームを開けた。

そこで少女は不思議なものを見た。

矢神学園 二年B組教室 昼休み

「そういえば高美。そのブローチどこで買ったの？」

「え？」

「ほら、その赤いやつ。最近よく着けてんじゃん」

南がすつ と高美の胸元を指差した。そこに赤い鳥の形をしたブローチがあった。

「え〜と、これは、ね」

高美は迷った。これは別に買ったものではないし、経緯を話すわけにもいかない。さて、なんと答えようとちょっとだけ考え、パツクのミックスジュースのストローをかじっと少しだけ噛んだ。

「その間は、もしかしてオトコからのプレゼントなの!？」

間の開きに鈴木がバツと指摘し、思わず手に力が入りミックスジュースを逆噴射してしまうところだった。

「こら、この前で少し自重すんじゃないかったのかあんたは」

「う、ごめん」

間弓の言葉に、鈴木はシヨボンとする。高美を追いかけてまわして軽いケガをさせてしまった事を気にしているようだ。

「んぐ。いや、そんな気にしないでいいよ。大したことなかったし」

口に少しだけ溜まったミックスジュースを飲み込んで高美は軽く腕を回して問題ないとアピールした。

「うん、でももうしばらくは自重する……」

と、鈴木は言っているがおそらく自重期間の解禁はすぐに来そうだと鈴木以外の全員が思った。

「んん、それはともかくとして」

南が再びブローチを指差した。

「そのブローチはどこで買ったのよ？」

「え？ えと、これは買ったわけではなく……」

高美は頬を掻きながらさりげなく小声でブローチもといブローチに変身しているホークに囁いた。

（ど、どうしようホーク……なんて言ったらいい？）

……。

しかし、返事は返って来なかった。

（あれ？ ホーク？ ちょっと、ホーク？）

「なにブツブツ言ってるの？」

「え！？」

本人はさりげなくやっていると思っていても周りには気づかれていたようだ。

「な、なんでだろ」

ちよつと焦りながら惚けてみた。

「？？ 急にどうしたのよ？ もしかして、マジで鈴木の読みどおりにオトコからのプレゼント？」

「な！ んなわけないでしょ！？ プレゼントと言えばプレゼントかもしれないけど！？」

言ってしまったと思った。なんでいまプレゼントって言ってしまったんだろう。ホーク本人が変身しているので厳密にはプレゼントではないのでは。

「ん、つまりは誰かからのプレゼントて事は間違いないのね」

「」「誰から？」「」

友人達は何だか興味津々だ。南や間弓もプチ鈴木になっている気がする。

まずい、変な誤解はまずい。高美は速攻で頭をフル回転させて、思いついた言葉を声にした。

「ま、ママから！ ママから貰ったの！！ 掃除してたら出てきたやつを！？ ほら、なんか少し古いデザインしょっ！？」

何だか苦しいような自然なような。友人達はうまく納得してくれるだろうか。

「なに、ママから？」

「なんだ、それならそう言えばいいのに」

「ふーん。まあ、納得でことで」

何かあっさりと納得してくれた。良い友人達だ。

「いや、ハハハ、なんか恥ずかしかったんだよね。おさがりって

いうのが」

高美は取りあえずほっとして、ダメだしにもっともらしい言葉を付けた。何だか胸元から多少の熱を感じるが。

「そう？ あたしは好きだな」

「つか、そういうのっておさがりって言わないんじゃない？」

「どっちかと言えば、母から娘への嫁入り前の贈り物みたいな？」

「いや、そんなことは無いと思うんだけど……」

というか実際はママからの贈り物ではないのだが。せつかくオチが着きそうだから、余計なことは言まいと高美は心で口元を押さえた。ところで高美はひとり足りない事に気づいた。

「あれ？ そういえば流香はどこにいったの？」

話の輪の中に幼なじみ 青海 流香が入って来ないと思ったたらそもそもその場にいなかった。

「言われてみれば」

「どこいった？」

「ん？ るかちーならたしか」

鈴木は何かを知っているようだ。チューとパックのコーヒー牛乳を一口啜る。

「なんか用事があるっぽいよ」

「用事って何だろう?」

「さあ? でもはつきりしてるのはオトコ絡みじゃないね。あたしのセンサーがビビっとこなかったんだよね」

「誰も聞いてないよそんなことは」

はたして、間弓に一蹴された鈴木予想は当たっているのだろうか?

さて、流香の用事とは……………。

「僕と付き合ってください!!」

そのころ流香は、告白を受けている最中だった。鈴木センサーは今日も絶不調のようだ。

「ええと」

流香は困り顔で空を見上げた。

(どうしよう)

相手は一年生のちょっとカワイイ系の男子で、彼の声からは真剣の

色がみてとれた。彼にとって一生一代の告白だった。

だから流香も、ちゃんと真剣に考えて、返事を返した。

「ごめんなさい。好きなひとが………いるんです」

流香は頭を深々と下げて、彼の告白を断った。

彼には悪いことをしただろうか。考えてみても良かったかもしれない。

少し無理した笑顔で失恋を受け止めた彼を見ていて流香は少しだけそんなことを思った。

だけど、彼に期待を持たせるのもいけない気がした。流香に好きなひとがいるのは間違いなかったから、流香自身が失恋をしない限りは彼の想いは叶うことは無い。

（それにしても）

流香はさっきの彼を思い出しながら少し頬を染めた。

（あんなにまっすぐな告白は初めてかも知れないです）

友人達には気づかれていないが流香は何度も告白というものを中部に入ってから経験していた。軽いものもあればさっきみたいになまっすぐで真剣な告白もあった。

いずれも全て断ってきた。好きなひとができる前からずっとだ。特定の相手と恋人になることは凄く特別なことで、大切にしたい初めてのひとつ。できるなら流香は好きなひとと恋人になりたいと思

っているが、それはとても叶わないだろうなと諦めている。好きなひとは自分の好意を知らないはずだから。それゆえに、さっきの告白に少し迷ったのかもしれない。あんなにまつすぐに好意を向けられるのはとても幸せなことだとも思えるから。

（あんなにまつすぐに、想いを告げられたら、私はともかく永くんはもしかしたら……で、思っちゃいますね）

色々と考えていたら唐突に二番目の兄 永梧の事が頭に浮かんだ。兄 永梧は長らく片想いをしている。素直になれないために、関係を崩したくないためにズルズルと引つ張って、結局疎遠になりつある。数日前に、勇気を振り絞ったのだろう。ガチガチに緊張しながら、言付けを流香に頼んできたが、結局相手の都合が合わずそのまま宙ぶらりんな状態で、止まっている。

妹としては兄の恋愛は応援したい気持ちはあるが、このままの状態が続いたら 彼女 に好い人ができてしまうだろう。 彼女は とても元気で可愛いから。

フウ、と流香はため息を吐いて再び空を見上げた。

「高美ちゃんは好きなひとっている？」

「ブフツ！？ い、いきなりなに！？」

放課後、流香と一緒に帰っていた高美は突然の言葉に買い食いの

たつぷり苺のイチゴクレープを吹き出しそうになった。

「んー、なんでしょう。なんとなく？ 高美ちゃんこんな話をしたこと無かったなと思って」

流香がニコリと笑ってハチミツたつぷりのハニークレープを上品に少しだけ口にした。

「なんとなくって……いや、確かにしたことないけど……ハグッ！」

話の内容に戸惑いがちに目を游がして、それを誤魔化すように高美は手に持ったイチゴクレープを豪快に口たつぷりに頬張って口に栓をした。イチゴソースと生クリームがほっぺたに付いた。

「ほっぺたに」

流香がクスツと笑って高美のほっぺたのクリームを指で拭くとパクツといたずらっ子ばく舐めた。

「むむう……………」

高美はちよつと恥ずかしげに口をモゴモゴと動かして横目で流香を見た。

「なんでこんな話したいの？」

流香には敵いそうに無いと思った高美は観念して話に付き合うことにした。だが、その前になぜ流香が急に自分のコイバナについて聞

きたいのかを高美は考えた。

「もしかして流香、好きなひとでもできた……なんて、無いかな」

流香とは子供の頃からの付き合いで、中部に入ってから綺麗になったなと思うが、今までの流香を見ていると好きなひとができるのはまだ先だなと高美は思っていた。

「えっと……高美ちゃんにはもう言っていていいかなあ」

だが

「います……好きなひと」

「だよね、て……エエエエツツ!!?」

幼なじみは高美の予想よりも随分進んでいたようだ。高美はあまりの衝撃に手に持ったイチゴクレープをグシャリとつぶしてしまった。

「うああ、しまった。わたしのイチゴ」

「大丈夫、高美ちゃん。はいハンカチ」

「あ、ありがとう流香……で、それよりも！」

イチゴクレープを潰して落ち込んでいる場合ではなかった。高美はイチゴクレープの無事な部分を口に押し込んでモグモグと口を動かしてゴクリと飲み込んで、ハンカチで掌を拭きながら流香を見た。

「え、いつから？ 全く気づかなかっただけど!? わたしの

知ってるひと!？」

「とりあえず、落ち着きましょ」

ちよつと興奮気味な高美を落ち着かせてから流香は少し照れながら答えた。

「えつと、誰かというのはちよつと言えないですけど」

「そうなんだ？ えつと、どんなひとなの？」

流香は少し夢みる乙女のように瞳を輝かせる。

「そうですね………凄く可愛くて、たまにワイルドなひとかな？」

「可愛くて、たまにワイルド？」

なんだか想像しづらい。

「出会ってからそんなに日は経ってないけど、私の全部をさらけ出せるひとです」

幸せそうに語る流香の姿を見ると、そのひとのことを流香は凄く好きなんだなということが高美にも伝わってくる。ちよつと先を越されたような寂しさを感じつつ、高美は流香を祝福することにした。

「というより、私のことはいいんです。高美ちゃんはいないんですか？ そういうひと」

「んん、わたしはそういうのはまだないかな？」

「そうなんですか？ へへ」

流香は何だか意味深に微笑んでなにやら考え込んだ。

「どうしたの？ てか、結局わたしの好きなひと聞くの何か意味あつたの？」

「それは、秘密です」

「んむう？」

人差し指を鼻に当てるシー の仕草を見ながら高美は首を傾げた。

「あ、高美ちゃん。食べかけだけどハニークレープいります？」

「え、いいの！」

「イチゴクレープ台無しにしちゃいましたから」

「うわあ、ありがとう！」

高美は喜んでハニークレープを受け取った。

「ふふ、それで喜んでもらえてよかったです。」

「うん、これもちっと食べてみたかったんだ」

高美は小さな子供のようハニークレープにパクついた。流香はそ

れを見てニコニコしながら横を通り過ぎる自販機を眺めて、急に思いついたように立ち止まった。

「ん？ どつたの流香？」

「はい、ちよつと」

流香は言つて鞆から財布を取り出し、その中から小銭を自販機に投入し、ペットボトルのサイダーを購入した。

「あれ？ 流香つて炭酸苦手じゃなかった？」

「いえ、これは私ではなく」

取り出し口からサイダーを取り出すと流香はニコリと微笑んでサイダーを軽く揺らす。

「おみやげです」

「おみやげ？」

「いつたい誰のおみやげだろう？ 永くんかみなにいのかな？
高美は首を傾げてポニーテールを揺らした。

「ただいま」

流香はスイミングスクール「イルカコミュニケーション」の裏側にある自宅のドアを開け、靴を脱いで玄関を上がる。

両親はスイミングスクールの仕事の真っ最中。二人の兄、「水喜」みなきと永梧もまだ戻ってきてはいないようだ。この家にはいま流香しか。いや、この家にはもうひとりいる。

流香は少し弾むように二階の自室へと駆け上がり、そのまま滑り込むようにドアを開いてにこやかに笑った。

「ただいまです。 シャード くん」

彼女の声にベッドに横たわっていた青いイルカのヌイグルミが突如起き上がり、大きな瞳を流香に向けた。

「おかえり、ルカ」

4・覚醒！ 水の乙女！！

「ふい、また母上が来たのかと焦ったぜ」

空中をクルンと回転し、青いイルカが汗を拭う仕草をする。

「え？ お母さんが。大丈夫でしたかシャードくん」

「ああ、咄嗟にベッドの上でヌイグルミの真似をしておいた。まあただ掃除にきたただけだったが肝が冷えたぞ」

シャードはその時の様子を思い出し、プルプルと震えた。

（あ、やっぱりこの仕草は何度見てもカワイイですねシャードくんは）

流香は無意識にやっているシャードの仕草にホッと心の中で和んだ。本人に言つと瞳の色が不満げになるのであくまで心の中でだけだ。その代わりにしっかりとシャードの仕草を堪能することにした。

「さて、ルカも帰ってきたし、元に戻るか」

シャードがその場でクルンと回転するとイルカからサメの姿へと変化した。

「うん、ワシにはやはりこの姿がしつくりとくる」

声質もイルカの時は少年のようだったのがサメになると落ち着いた成人男性のようなトーンに変化していた。

「……………」

「どうしたルカ。眉を八の字に下げて」

「あ、もうワイルドなシャードくんに戻るのかなと思ひまして……」

流香はちよつとガツカリだった。カワイイルカのシャードをもつと堪能しようと思つただけに尚更と。ワイルドなシャードも嫌いでは無く。むしろ好きではあるのだが。

「全くおかしなことを言うなルカ。これがワシの本来の姿だつてのに」

渋めな低音で、何が不満なのか解らないとシャードは瞳をパチクリとさせた。

「うゝん。女の子の事はよく解らないつてことでひとつ」

そついつて流香は人差し指を口にあてウインクをした。

「ますます意味がわからん。それと、ゴミでも目に入つたかルカ？」

「……………ひどいです。精一杯のカワイイポーズのつもりだつたんですよ？」

「カワイイポーズとやらの意味はあるのか？」

「ふう、もういいですよシャードくん」

初めて出会ったあの日からにも変わらない無愛想な言葉のシャードに流香は溜め息をひとつついて天井を見上げた。

流香がシャードと出会ったのは自宅のバスルームだった。栓を抜いたはずのバスタブに何故か水が溜まっており、その中でシャードはイルカの姿で浮かんでいた。

流香は驚いてシャードを水の中から救いだしバスタオルにくるんだ。

「なんでイルカがこんな所に？ 随分と小さいですけど、子供のイルカ？」

とても衰弱しているように見えた。家族を起こして動物病院に、でも、イルカを見てくれる動物病院なんてあるのだろうか？ グルグルと頭の中で色々考えながら迷っている流香。そんな彼女の耳に謎の声が響いた。

「む・・・・・・・・無事・・・・・・・・か・・・・・・・・ホー・・・・・・・・
・ルア」

少年のような声。それは流香の抱き抱えているバスタオルの中から聞こえた。

そつと抱き抱えたイルカを見た。まさかと思った。

「な・・・・・・・・ウウ・・・・・・・・おお」

だが、間違い無かった。このイルカは人の言葉を喋っている。

流香は慌てて、抱き抱えたまま自室へと戻った。同時に、自分が

なにも着ていない事に気づいて更に慌てた。そして、足をもつらせてベッドの上に倒れ込み、イルカを直接胸に強く抱きしめてしまった。

ヒヤリとした直に伝わる冷たい感触が一瞬した。が、次の瞬間には少し暖かい感触とどちらのものとも解らない鼓動。流香は自分の胸に視線を向けると、大きな瞳がこちらを向き、その瞳に一瞬、津波のような 大海 の 水 がこちらに迫ってくるようなビジョンが見えた。

流香はそれに呑み込まれたかのようにジッとその瞳を見つめていた。

そして、青いイルカが目覚めの第一声を口にした。

「あんだ・・・・・・・・誰だ」

「あ・・・・・・・・え？ あ、私、流香です。青海・・・・・・・・流香」

これが彼と流香の初めての会話となった。

彼、「シャード。クルフィン」は、今の自分の現状を理解し、目の前の少女 流香に礼を言い、自分がどういった存在かを説明した。

シャードいわく、彼は別の世界「エレメンテ」からある使命を持つて他の仲間と共に別の世界へと旅立ち、その直後に彼らと敵対する存在からの攻撃を受け、この世界に流れ着き、気を失っていたこと。

シャードには心の 水 というものが探知でき、流香にはとても強い 水 の力があり、おそらくその 水 の力に直接触れることによって自分は意識を取り戻したのではないかと。そして、無理を

承知で流香に自分の中の 水 の力が回復するまで休ませて欲しい
とお願いした。

この話を流香はすんなりと受け止め、彼を休ませることに了承
した。

「本当にいいのか？」

自分を信じてくれるまで時間が掛かるだろうと踏んでいたシャード
は驚いて聞き返した。

流香は着替えた淡い黄色い水玉模様のパジャマの袖を直しながらク
スリと笑う。

「だって、あなたを見てると嘘だとは思えないですから。それと
私達の世界ではこんな言葉があるんです」

流香はシャードの鼻先に軽く人差し指を当てるところいった。

「困った時はお互い様。助け合っていきましょう」

この時の流香はシャードの事を特別な目では見ていなかった。この
奇妙な彼をただの親切心から助けてあげようと思ったのだ。

「キミは変わっているな、流香」

「ん、たまに言われてるかもしれませんがね」

こうして流香とシャードは二週間近く共に過ごしていたのだった。

共に過ごすうちに流香は色々なことを知った。

シャードの本来の姿はサメに近く、イルカのような姿は弱っている時と力を蓄えるためのいわゆる充電形態で、シャードの種族の特性で、派生種族である他の仲間達はこういった変化は無いということ。

シャードの世界 エレメンテ は闇の侵略を受けていて、シャード達は世界を救うためのパートナーを探しにやってきてシャードはとても強い心の 水 の持ち主を探していること。

そして、彼は流香の人生の中で出会った事の無いタイプの異性であった事も。正直、流香はシャードにマスコットの可愛い動物の可愛さを持っていた。だが、すぐにそれは間違いだと気付かされる。

「ルカ、お前は意外と抜けてんだな？」

シャードはとても口が悪かった。

「へー、上手いもんだな。こういうのは素直にルカを尊敬する」

だが、その反面よい所を見抜く事と褒めてやる気を起こさせる事に長けていて。

「ルカ、お疲れさん。今日は大変だったんだろう」

誰よりも優しくかった。だんだんと、流香の中でひとりの人間として移り込み始め、そしていつの間にか、シャードの事を好きになっていた。

流香にとっては外見などどうでもよかった。ただこの胸の中に溢れ

る初めての感情を大切にしたかった。どんな形であっても自身の初恋を否定したくは無かった。ただ、シャードの使命を手伝いたい。もっとシャードと一緒にいたいという想いを日に日に募らせながら、二週間近くの時間が過ぎていた。

「あ、シャードくんの好きなサイダーを買ってきましたけど今すぐ飲みますか？」

ルカがニコニコと鞆から先ほど自販機で買った炭酸飲料を取り出した。

「おお！ これは嬉しいな！ もちろん飲む！！」

シャードの瞳がキラリと輝いた。

「ふふ、コップを取って来ますね」

無邪気な子供のように喜ぶシャードをニコニコと見ながらコップを取りに部屋を出た。

冷やされたコップに数個の氷。そこにサイダーが注がれるとシュワッと弾けるような爽やかな音を起てて、氷がピキピキと鳴り、カランとまるで楽器のような音が耳に届く。なんとも素晴らしい前置き。冷えきったコップを両の手で取り喉に流し込む。パチパチとした刺激が喉に伝わり、氷も再びカランと鳴る。飲みきったあとに残る喉の刺激と口内の甘い余韻。至福。些細なれどこれは間違いな

き至福。この飲み物はまるで魔法のような瞬間を与えてくれる。

「うめえ……やっぱり、サイダーは最高だ……」

余韻に浸りながらカランとコップの中の氷を揺らして鳴らすシャード。

「相変わらずいい飲みっぷりです」

幸せそうなシャードの顔を見ると流香も凄く嬉しかった。

「ん、そうか？ おお、つい一気に飲みきってしまった。」

「はい、もう一杯」

「お、ありがとう」

「シャードくん」

「ん？」

コップにサイダーが注がれる中、流香はあることを切り出した。

「あのことにしてなんですけど……」

注ぎ終わると同時にシャードの表情が曇る。コップをそつと床に置き、流香を見た。

「そのことについてはもう話は付いたはずだぞ」

流香もサイダーのペットボトルを置き、シャードの目を見た。

「私はまだ納得していません」

「.....」

流香はまっすぐな瞳でこれで何度目かになる事を言った。

「シャードくん。私をあなたのパートナーにはできませんか？」

シャードもまっすぐな瞳で流香を見て、何度も繰り返した同じ言葉を返した。

「何度でも言うが、ルカをワシのパートナーにする気は無い」

「どうして？ 私はシャードくんの言う心の 水 を持っていて、それがとても強いのでしょうか？ 必要な条件は満たしているはずですよ」

流香はシャードと一緒に彼の手伝いがしたかった。必要だと言って欲しいのだ。数日前、彼は言った。「ルカ、ワシはそろそろ行動を起こそうと思う」この意味はここを出ていくということだろう。

行かせたくはない。シャードと一緒にいたい。

彼との繋がりを流香は求め、その結果導き出した答えがパートナーになるという事だった。どんなに危険でも構わないと本気で思った。

「ルカ、確かにお前の 水 はとても強い。けどな、ワシの求める 水 の力をもっと強いものじゃないと。ワシの使命は遊びじゃねえから。一時の馴れ合いで選ぶわけにはいかない」

だが、シャードもやはり頑なだった。キツイ言葉をわざと選び、流

香に嫌われるように何度も仕向けてきた。

「だったら、私をもっと強くなれば……シャードくんは私を選んでくれますか？」

だが、流香がシャードを嫌うような事はなかった。全くめげずに、シャードを説得し続けてきた。

「わからんやつだな、お前は。選ぶも何もない。ルカ、これ以上ワシの問題に首を突っ込むな」

シャードも折れるわけにはいかなかった。確かに、流香の水の力は信じられないくらいに強かった。いや、ここ数日でなぜかとても強くなってきた。シャードにはよく解らない何かを流香は心に持っているのかもしれない。一時的にでもパートナーを組むのは申し分ない、それ以上といえた。

だが、シャードは流香をパートナーにするわけにはいかなかった。二週間、たった二週間だが、シャードは流香の優しさを知ってしまった。

「首を突っ込むな」などと言ったが、自分が流香の家に流れ着いた、出会ってしまった事から既に首を突っ込ませているようなものだ。後悔した。自分の使命を流香に教えた事を後悔した。流香にはこれからも普通の生活をして欲しい。それこそ自分の事など忘れてしまつて。流香は優しい。優しすぎるからこそ自分達の世界の問題で戦わせたくは無かった。

だけど、流香は決めたら動かない頑固な一面も持っていることをシャードは知っていた。だから流香は絶対に諦めはしないだろう。

「ンガッ!!」

シャードはいきなり少し水っぽくなったサイダーを溶け掻けた氷ごと一気に煽った。

「氷が切れた。新しいのが欲しい。サイダーがまだ少し残ってるからな」

ボリボリと氷を噛み砕きながら流香にコップを渡した。

「一時休戦。一休みですねわかりました」

流香はコップを持って部屋を出た。

「・・・・・・・・」

きつと流香は諦めないだろう・・・・・・・・だから

(ごめんな・・・・・・・・ルカ)

「お待たせですシャードくん」

お盆に氷の入ったコップと、冷蔵庫に買い置きされていたサイダーを乗せて流香は部屋に戻ってきた。

「シャードくん？」

そこに・・・・・・・・シャードの姿は無かった。

（シャードくん、どこに行ってしまったんです！？）

シャードは出ていってしまった。窓に隙間ができていた。

（私がしつこくしたからいけなかったの？）

だけど、どのみちシャードは出ていってしまっただろう。シャードとお別れを流香はしたくなかった。本気でシャードの手伝いをしたかった。突然いなくなってしまうなんて。涙が滲んできた。同時に、まだ間に合うと根拠もなく思った。気づいたら流香は外へと駆け出していた。

（シャードくん。私はさよならは嫌です私は）

「絶対に諦めませんから！！」

流香は決意を新たに彼女らしくない叫びと共に、幼なじみ 赤星高美のように全力で駆けた。

流香のこの叫びを近くで聞いているものがいた。

「ん？ なんだありや、最近はなんか騒がしいのをよく見るな」

そのものはダボダボのデニム生地の作業着に似た服を着て、片手に買い物袋。片手にiPodのイヤホンを持ち。頭はボサボサの無造作ヘア。流香の走り去った方向を目を細めて眺めていた。

「あれ、うちの制服じゃないか？　もしかして、あの時の先輩の知り合いだったり……なわきゃねえか」

ハハハと笑ってイヤホンを耳に装着し、音楽を再開させる。まさか自分の推測が当たっているとも思わず、ただのひとりの通行人として、買い物袋を持ち直し歩き始めた。

「ルカ……怒っているだろうな」

河川敷のガードレールの下にシャードはいた。人気も無く。休むにはちょうどよかった。シャードはイルカの姿になり無駄な力を使わないように努めた。

「外を出歩くというのはこんなにもしんどいもんだったんだな……」

シャードは改めて自分がこの世界に来てから恵まれていたと、流香に護られていたという現実を思い知った。流香は寝るところも、食べるものも与えてくれた。なにより、仲間とはぐれて心の奥底で感じていた心細さを流香は埋めてくれていたのだ。

外に出る。それは想像以上に過酷だった。流香は特別であり、本来別の世界の人間に姿を見せるわけにはいかなかった。ここでは自分のような存在はいない。だから存在を知られてはいけない。姿を見られないようにここまで来たが、補給無しでは限界がある。いくらシャード達の姿が変えられる力があつたとしても、それは心の力

を消費する。シャードのような蓄える形態があるものは割かし運の良い方なのかもしれない。すぐにでも仲間と合流できたりパートナーを見つけられれば話は別だが……もしも最悪の事態が起これば。

「考えるのはやめよう……」

不安が心を包み込み、どうしようもない恋しさが沸き上がってくる。やはり流香の元に

「考えるな！ 女々しいやつめ！！」

シャードは自分を詰った。女々しいやつと自分を詰った。

「今更、戻れるものか……どうせ別れは来るんだ。ワシとあの娘には別れが」

（シャードくん）

「！？」

目を硬く閉じると流香の笑顔が瞼に焼き付いていた。やはり、もう一度流香の元に戻りたいとシャードは強く思っている。この世界で初めてできた、友達の元へ。

「ち……くしよう」

シャードは体全体を震わせ、自分の心の中を呟いた。

「あいつの胸は、腕の中は、ワシには……気持ち良すぎ

るんだ」

彼の心の奥底からの本当の気持ち、告白だった。

「なんの話だい？」

そんな奥底からの告白を聞いたものがいた。いままで、誰もいなかったはずなのに、すぐ近くに気配があった。とても禍々しく気持ちの悪いものだった。シャードはこの気持ち悪さに覚えがあった。シャードは飛び退くように後ろへと跳び、気持ち悪い気配の方向を見た。

「貴様は！！？」

そこにいたのはひとりの男。白粉を塗りたくったような白い顔。紫色の口元の裂けたメイク。身に付ける黒衣とヨレヨレでブカブカな靴が道化師のよう。作り物のように細い両の手足と毒々しい髪の毛はとても人間には見えなかった。

男はニイツと笑い口元を更に歪めてシャードを不気味に見つめる。

「やー、久しぶりー、青いの」

まるで友人に話すような口振り。

「アブテム野郎か！！」

シャードは目の前の男とは真逆に敵意をむき出しに睨み付けた。あの男の笑いの奥にある暗く濁った絡みつくような敵意をシャードは嫌というほど感じ、味わってきていた。

「名前ぐらいはー、覚えてねー、ボクはワレだー」

「テメエの名前なんざ端から覚えてねえんだよー!!」

ワレと名乗った男はシャードの返答にやれやれと首を降った。

「全く、キミといい、赤いのといい、酷いやつらだねー」

「ほざきやがって！ 酷いってのはな、テメエら見てえな外道の事を言っんだー!!」

シャードは吐き捨てるように言葉をぶつける。だが、次にこの男ワレの言った言葉のひとつを思い出し、目を見開いた。

ワレは言った。赤いやつと。

「まさか、ホークに会ったのか……ここにはホークも来てんのか！ 答えるー!!」

ワレはおかしそうに肩を揺らして笑い答えた。

「あー、フフフ。もちろんさー、会った会った。相変わらずキミと同じ好戦てきー、だったねー」

「おい、テメエまさかホークに……………」

「どう答えて欲しいー？」

更に口が裂けそうな笑みをワレが作りあげる。

「きつさまあああつつつ！！！！！」

感情が爆発する。シャードはサメの姿へと変化し、水の力を解放し、ワールへと突っ込んだ。

「やめなよ」

ワールは笑みを消して前方に手を突き出し、それを弾いた。

「ツツツツ！！！？」

シャードが壁に吹き飛ばされ、声にならない声を洩らし、地面に滑り落ちた。

「あわてなくてもー。キミの相手はこれがしてくれるからねー」

言いつとワールは毒々しい髪の中から、小瓶と黒い宝石を取り出した。

「さあ、いこうかー」

小瓶を揺らす。中にはなにやら黒いものが粘りけを持って貼りついていてた。その小瓶の中身に、ワールは黒い宝石を「飲み込ませた」。

——アープ・モーンズ！！

ワールの手の中の小瓶が黒く光り、目の前に黒い巨体が現れる。

『んんんガッ！！！？』

アープ・モンスター ヘドロンガ が生まれた。それは形をほぼ保
つていない。崩れては戻り、戻っては崩れるヘドロの塊。その塊の
中に酷く濁った目がシャードを見つめていた。

「どうだい、ボクが数日掛けて選り抜いた素材は。クク、ここは
やはりいいねー。なんにもしなくても人間が勝手に素材を作ってく
れるからさー」

横のワレが楽しそうに笑いながら手を叩いた。

「ああ、そういえばー。青いのー、キミーひとりー、パートナー
いないー？」

「く………う………あ
」

「ふんふん、どうやらないみたいねー。それに、動けないとみた
じゃあ、全く悪いとは思わないけど、終わらせてあげるね。妙な小
細工使われないうちにさ」

ワレの声のトーンが変わり、酷く怖い表情で片手を上げる。ヘド
ロンガの腕が固定形成される。

「これくらったら一発で終わるよ。じつくりと苦しんで終わるん
だけどー!」

『ガ~~~~~!!??』

ワレが邪悪な笑みを浮かべて手を下ろすと同時にヘドロンガの腕
が、シャード目掛けて降り下ろされた。

シャードの体は動けない。まだ体に力が入らない。

（こんなところで・・・・・・・・ワシは）

シャードは動かない今の自分を呪い、悔しさと共に、自身の終わりを感じた。

「ツツ！！！！？」

声が声にならない叫び。そして彼は

「シャードくん！！？」

いまでもとも聞きたい少女の声を聞いた。

叩きつけられるヘドロの拳。異臭を放ち周りに飛び散り、地面に根付いた草花を汚し、枯らした。ブスブスと嫌な音を起てる。こんなものを真正面からくった生物はもはや生きてはいないだろう。

「そんな」

だが、シャードは生きていた。

「どう・・・・・・・・・・して」

彼はヘドロの拳をくらってはいなかった。シャードの身体は横に跳んでいた。いや、「一緒に」跳んだのだ。彼は包まれていた。温かな腕の中で、少女の柔らかな胸の中で。

「ルカ！？」

「大丈夫、ですか？ シャードくん」

少女 流香が柔らかな優しい笑みをシャードに向ける。

彼女は地面に倒れ込んでいた。シャードを助けるために、形振り
は構ってはいられなかった。剥き出しの膝と手の甲に幾つもの擦り
傷を作り、微量のヘドロが制服のスカートに付着し、端が少し溶け
ていた。ジワリとした痛みが流香の太股に広がっていく。少女の身
体には耐えられない痛みのはず、だけど、少女は笑っていた。腕の
中のシャードを救えた事を、止めどない喜びを感じていた。

「なんなんだお前はー」

無粋な声が彼らの耳に響く。酷く憎々しげな声。シャードを酷い
めに遇わせようとしたワレレの声が。

「その服はー、まさかねー」

そして、流香を見る目に今までに無い不愉快さが込められていた。

「あなた・・・・・・・・ですか」

流香が両肘を使い、上半身を起こし、真の強い眼差しでワレレを見
据え

「あなたが、シャードくんの言っていた!..!」

痛む足で立ち上がり、叫んだ。

「なんだよー、その目は！ その顔は!」

ワールは憎しみの籠った目を流香に向け、アープ・モンスターへ
ドロングに拳を形作らせる。

（こいつが、あの青いの、小細工のガキ！）

嫌な汗を掻きながら、ワールはこの場で今度こそこの二人を潰す事を決めた。目覚める前に消滅させる。

「ルカ！ やめろ、お前、足が！！」

シャードは震える足で立ち上がる流香に叫ぶ。こんな足では流香は立ち上がることができないはず、それなのに流香は立ち上がっている。それがどんな苦痛かシャードにも分かる。こんな真似を流香にはさせたくはなかった。

「シャードくん」

流香が叫ぶシャードに笑みを向ける。その笑みの奥の瞳に強い覚悟の色がシャードには見えた。

「お願いがあります」

決意の言葉を紡ぐ。

「私を、あなたの、パートナーに」

何度となく言ってきた、断れ続けられた言葉。だが、今の彼女の覚悟はいままでのもとは違っていた。

「一時的でも、いいですから、私を………選んで！！」

おそらく、この現状を打破するには選択肢などはない。流香にはこんな危ない目にはあってほしくはない。それはこれからも変わらない。

だから

「すまん、ルカ！」

今はルカと共に戦おう！ シャードの決意も決まった。
シャードは瞳を閉じ開き、水の唸りを瞳に宿らせ、流香の腕から飛び立ち、体に水の膜が形成される。

——ウィー・ガードセット——！！

流香の頭に反響する力強いシャードの声。シャードの体が水の玉へと姿を変え、流香の腰を包み込む。そして、弾けた。流香の腰には青いポシエット型のカードリーダーが出現していた。

「あ、あれは——！」

ワレは焦りの色を浮かべ、ヘドロンガを流香にけしかけた。

「やらせるか——！？」

『ンガ——！！！』

ヘドロの拳が再度襲ってくる。

だが

「な、に！！？」

流香の目の前に水流のうねりが形成され、ヘドロの拳を受け止め、弾けると共に押し戻した。

『ガッツ！！！！？』

そして、流香の目の前に、一枚のカードが出現した。

（ワシの水の全て、ルカに託す！ 後は感じるままに、唱える！ ルカ！！）

「はい！」

流香は 水 のカードを掴む。響くシャードの言葉のとおり、感じるままに、カードをポシエットにスライドさせた。

——ヴァル・ガードアップ！ 水のエレメス！！

カードが激しい 水 の渦となり、流香の体を包み込む。彼女の体から全ての痛みが消え、流香は流れるようにその場でステップを踏み、体を回転させる。

足の渦が弾け、制服スカートが青いスカートドレスへと変化する。体の渦が弾け、流香の身体は青のオーラドレス。 水 のエレメスが形成される。

弾け飛んだ水の飛沫が唇に触れ、潤いの 水 のチークが引かれる。

脛に触れ、潤いの 水 のアイシャドーが引かれる。

大量の飛沫が流香の長い黒髪を濡らし、鮮やかな青色へと変化する。

そして二つの水の玉が瞳を濡らし、潤いの輝きと変化をもたらす、それはまるでサファイアのような深く美しい 蒼 の輝きとなる。

彼女は新たな姿で目覚める。両の手を胸のタイに添え、瞳を閉じ、強い意思で瞳を開き力強く両手を縦に広げ、生まれ変わった自身の名を叫ぶ。

—— 大海 に潜む 水 の牙！ 舞い泳ぐ 守護 の 乙女
！ ヴアルウィーター ！！

「 ヴアルウィーター だって。クク、やっぱりお前達も！？」

覚醒した ヴアルウィーター の姿に、ワレは齒噛みをした。目の前の存在の気迫が伝わってくる。それはまるで数日前に体験した再現のように。

（そんなことあるか！ 今回はいいつらように万全を期して用意したアープ・モンスターなんだ！？）

ワレは嫌なビジョンを振り払い。再びヘドロンガに拳を形作らせる。

そんなワレに ヴアルウィーター は拳を前に突きだして応える。

—— あの口振り。あいつは、ホークは無事みたいだ——

「 シャードくん。よかったですね」

—— ああ、だが今はあいつを——

「はい！ やつつけます！！」

ヴァルウィーター が大地を踏みしめる。

「ふざけるな！ このアーブ・モンスターに触れることはできない。倒せるわけがないだろう！！」

ワレが怒りを露に叫び、ヘドロンガの拳を繰り出した。触れたものの生命を奪う攻撃が、速度を上げて降り下ろされたる。いままでにはない高速の一撃。

だが、この一撃の中に ヴァルウィーター はいない。

大地に踏みしめた足を解放し、 ヴァルウィーター は跳んだ。逆きりもみ回転。強い眼差しで ヴァルウィーター は回転を空中で止め、ヘドロンガを見据える。

——触れるのがダメなら——

ヴァルウィーター の両指がタイの前で横に揃えられる。

——触れなかったらいいんだよ！ ルカ！——

頭に響くシャードの声と共に、両の指を開放する。

「アクアビュート！！」

パチンと指を鳴らす音と同時に両腕を横一線に広げる。両の指から溢れる 水 の力は聖水の鞭となった。

『ンガ~~~~!!!』

ヘドロングの攻撃が来る。今度は拳を作らない一直線の攻撃。

「ライン！」

ヴァルウィーター はそれを右のアクアビュートで横一文字に閃する。触れたヘドロが清らかな水となって弾け飛ぶ。

『ガ~~~~!!!?!』

怒り狂った咆哮。細かい無数のヘドロが槍のように ヴァルウィーター を突き上げようと伸びる。

「ローリン！」

左のアクアビュートを超回転させる。雄大な 水 の壁となり、全ての突き上げてきたヘドロの槍が水の飛沫へと変わる。

「ラッシン!!」

ヘドロの槍が止むと同時に高速で両腕を振り上げる。アクアビュートの連打がヘドロングに叩きつけられる。

『ガッツ!!!!?!』

それはまるで牙の如く体を削り取り、清らかな水へと変えていく。

「ハイツ!!」

両腕を横に一閃し、連打が止まり、アクアビュートが消失する。滞空時間の終了。　ヴァルウィーター　は地面にぶつかる直前

「ハッ！」

体を信じられないスピードで回転させ、大地へと足を滑り込ませる。砂ぼこりが舞う。一瞬静止した　ヴァルウィーター　の隙をヘドロンガは見逃さなかった。巨大な拳を形作り、叩きつける。だが、それは　ヴァルウィーター　の隙では無かった。

—— 撃ち込め！——

ヴァルウィーターは既にタイの上に両の指で丸を作り出していた。

「バブルス！」

それをシャードの合図と共に口元へ向け

「シューター！！！」

解き放った。

無数の泡のリングが指の丸から生まれ、ヘドロの拳を締め上げた。

『ガ〜〜、ガ〜〜！！』

締め上げられた拳は形を崩さない。崩すことができない。バブルスシューターの拘束がそれを許しはしない。

ヴァルウィーター　が跳ぶ。自身の拳を振り上げて、ヘドロの拳

を締め上げるバブルスシューターへとぶつけた。

バブルスシューターが破裂する。ヘドロの拳が吹き飛び、水飛沫となる。

次々とバブルスシューターに拳叩き込み。破裂させる。飛沫は、雨となつて降り注ぐ。

『ガアツ！ ガアツツ！！！？』

ヘドロongaが苦しげな叫びを挙げ、最後のバブルスシューターを振りほどこうと歪な腕を作り上げる。

だが、その腕よりも先に

—— 行ってこい！！——

「ヤアアツツ！！」

ヴァルウィーター のソバットがバブルスシューターに叩き込まれ、破裂と共にヘドロongaの巨体がワレー目掛けて吹き飛んでいく。

「こつちに来るんじゃない！！」

ワレーが悲鳴に近い声を挙げ、暗闇の中に退避した。ヘドロongaはなにも無い地面に滑り落ちた。

—— これで終わらせる！——

「はい！！」

ヴァルウィーター は吹き飛ばしたヘドロongaへと跳ぶ。最後の一撃を決めるために。

——ウィー ガードターン!!

ポシエツト型カードリーダーを押し込み、上下を反転させる。

——オン ブーステック!!

ヴァルウィーターのエレメスが変化する。両袖部が弾けて水の玉となり、彼女の両腕が露となる。

スカート部が弾けて水の玉となり彼女の両足が露となる。

水の玉が両手に集まり、水の渦となる。ヴァルウィーターが渦を握り締める。

「ウィーターアーチェー!!」

引き抜くように両腕を振り上げ、この世界に召喚するは、青く輝く自身の背丈程の聖なる弓。氷のように研ぎ清まされた高潔な一矢。荒れ狂う水の刃。

それらをヴァルウィーターは合わせ重ねる。力の限り引く。水音に似た弦が響く。

その姿は、まるで大海に潜む美しき狩人。

速く速く、更に跳ぶ。目標を真下に捕らえた。

サファイアのような瞳が見開かれ、輝きを増す。

——水の一闪 射撃!——

「ウィーター・ファイナリー……!!」

青き一撃が放たれる。正確に標的が射抜かれる。

『ガアアアアツツッ！！！！？』

断末魔の声を挙げ、ヘドロの体が水柱へと姿を変え、巻き上げられる。ヴァルウィーターは全身を濡らしながら地面に降り立つ。遅れて巻き上げられた水柱が雨となり大地を浄め、破壊の痕跡を完全に浄化した。

「終わりましたね」

青い光と共に変身が解かれる。ヴァルウィーターの姿からただの女子中学生 青海 流香へと戻る。同時に、太股の怪我也、擦り傷も、制服のスカートも、全て無かったかのように元に戻っていた。サメの姿のシャードが彼女の周りを一周し、警戒をする。あの禍々しい気配は既に無かった。

戦いのどさくさに姿を消したのだろう。シャードはフツと力を抜く。姿がイルカへと変わり、ゆっくりと流香の方を見た。

「ありがとうルカ」

シャードは頭を下げて、礼をいい、次の言葉を出すのに少し時間が掛かった。シャードは（しっかりしろ）と自分を叱りつけ、流香に告げた。

「お別れだなルカ」

とても辛い言葉だった。だが、今日はっきりとした。やはり自分と

いると流香に危険が及んでしまう。だからここで別れるのは正しいことだとシャードは思った。

だが、流香は

「え、嫌です」

そんな事は微塵も考えていなかった。とても明るい声でシャードの言葉を拒否し、彼をしっかりと抱き止めた。

「私とシャードくんはもうパートナーです。離れてはいけません」

シャードは啞然と流香の顔を下から見た。満面の笑顔が見える。シャードは首を降る。

「待て、あれは、一時的なものだ。緊急事態で仕方なかったって、ルカも解っていただろ」

「うーん。私、そんなことを言いましたか？ 覚えていません」

流香はとぼけて見せた。こんなとぼけた事を言う流香をシャードは初めて見た。

「ルカ？」

「私、シャードくんが離れていって改めて思ったんです。私はシャードくんが大好きだって」

「……………」

「それと、シャードくんは責任を取るべきなんです」

「せ、責任だと？」

「私、さっきのひとに顔を見られてます。だから私はあのひとに狙われちゃうかもしれないです」

「あ……………」

そうだ。その可能性は無いことではない。むしろ可能性が高いのではないだろうか。シャードはもしかしたら自分の方が間違っているのではと思い始めた。

「だから、一緒にいて護ってもらわないと」

「しかし、その場合。戦うのは流香になるんだぞ？」

「望むところです。私の決意は固いんです。シャードくんと一緒にいるって決めたんですから、ね」

流香はトントンと自分の胸を叩いた。

「いつか、私よりも強い 水 の力を持ったひとが来たら、そちらに行ってしまうって構いません。だから、それまでは私と一緒にいましょう」

「……………」

「それとも、シャードくんは私と一緒にいたくないですか？」

「・・・・・・・・いや」

シャードは首を振った。

「嫌なんて、思わない。ワシはルカと、「友達」と一緒にいたい。パートナーでいたい」

シャードは折れた、いや、自分の心に素直になった。まだ流香とは別れたくはないという自分の心に。

（そうだ、ワシがしっかりすれば、ルカを護っていけるはずだ）

シャードは決意した。ルカと共に戦う事を。

「すまん。新ためてよろしく頼むルカ！」

「はい」

シャードの言葉にルカは頷き、心の中にちょっとだけ複雑な思いを宿した。

（友達、かあ）

「どうした？ ルカ？」

「ん、何でもありません」

流香は満面の笑みでそれを隠した。

今はこれでいい。きっと自分の想いは伝わりはしないから、今は

一緒にいられるだけでそれでいい。

流香はシャードを抱え上げて、一番の笑顔を彼に贈った。

「これからよろしくです。シャードくん」

4・覚醒！ 水の乙女！！（後書き）

今度こそ短くできたかなあ……。色んな所を切りまくって
水の話は書き上げました。楽しんでくれれば幸いです。

ここで、なんで ウォーター ではなく ウイーター？ と思
った方に説明します。しょうもない理由なんです……。
むかし、えげれす人から英語を教わった日本人が耳だけの発音で
書き留めた日本語訳が ういーたー だったと昔だれかから聞いた
ような気がしまして、嘘か本当か真実は解りませんが記憶の片隅か
ら引っ張り出して使ってみました。違和感があったらごめんなさい
以上、しょうもない理由でした！！

あと、決めポーズを取らせてみようと思ってみましたら、もろに
元にした作品と同じポーズになってました……。気づいた
方はニヤツとしてくれると救いになります。個人的にはあのポー
ズは凄く決まっていると思います。単純だけど考えたひとは偉大で
す。

超長文になり失礼しました。

次回は 樹の話です。正直、この話を書くのが一番楽しみかも
しれません。

それではまた！

5・約束と混乱の縁

——「神輪町」住宅地 アパート「メゾン・ド・縁」 めぞん・
ど・えにし 十三号室 玄関

「ただいまー、帰ったぞ」

デニム生地 of 作業着らしき服を着たボサボサ無造作ヘアーの少年が
買い物袋を下ろしながら自分の帰宅を家族に伝える。

「ひーちゃあ。おかえりー!」

すぐに三歳の妹が元気にお出迎えをしに走ってくる。

「お、ただいま。みー。良い子にしてたか」

舌つ足らずな妹 真美香 まみか のお出迎えに少年はワシヤワシ
ヤと頭を撫でて返す。真美香はキヤイキヤイと喜んだ。

「ん〜?」「真彦」 まさひこ はどうした? まだ友達の家か
?」

「んーん」

真美香が違つよと首を横に振る。

「かえってうけど。まさちゃあまたかってにひーちゃあ of へやか
らまんがとっていてよんでうの。みーはまたおこらえるよってちゅ

ういしたのにきかないの」

事細かに真美香が少年に伝える。

少年はボンボンと真美香の頭を優しく叩くと

「またかあのやろっ」

十歳の弟 真彦のいると思われるリビングへと歩いていった。

そつとりビングへと音も無く滑り込む。 真彦は何も気づかずに勝手に調達した漫画を読んでいた。 背後には既に捕獲者がいることに気づかずに。そして今まさに

「こおらあっ!!」

「ウオアアツツ!!」

捕獲が開始され、ガツチリとヘッドロックが決まる。 真彦さ大絶叫の後、「グッ!」と短い声を挙げた。

「また俺の部屋に勝手に入ったんだってなあ」

「か、帰ってたのかよ……………」

真彦はバタバタと手を動かし逃れようとするが、完璧に決まったヘッドロックはその行為を全くの無意味にしていた。

「何を読んだ」

少年は読みかけの漫画へと目を向ける。そこには昔にヒットを飛ばした成り上がり系の不良漫画があった。少々お下品な内容な漫画で

ある。

「小学生にこれはまだ早いんだよ!!」

ヘッドロックの力を一気に強めた。

「ギヤアッ！ ギブギブギブ!!？」

その痛みにギブギブを繰り返し、何度も腕にタップを叩いた。

「たく、どつから引つ張り出しやがった。押し入れか？」

自分の部屋に漫画を戻して、真彦の頭をゴツンと小突いた。

「テエッ！ なんだよ自分だって去年まで小学生のくせに。横暴だよ！」

頭を擦りながら真彦はブーブー文句を言う。

「うるせえ、問題はそこじゃなくて勝手に人の部屋に入んなって事だ。それに、あれは父ちゃんの漫画だ。俺は読んだ事も無いの！」

あまり反省の色が見れないのもう一度軽く小突いておこうと手に軽くスナップを効かせた時、真美香がお腹を押さえながらリビングに入ってきた。

「ひーちゃあ。みーおなかすいた〜。」

「お、悪い悪い。すぐご飯にしような」

少年は言うつと真彦を軽く小突くのを忘れずに玄関の買い物袋を取り

にいった。

「きょうごはんなあに」

「ん、今日は残り物のカレーをだな」

「げ！ これで三日目じゃん！ やだよ俺は安直なカレーうどんなんて」

「ばかやろう。カレーは作ると大量に余るんだよ。ちゃんと食いきらないと勿体ねえだろうが」

「ちえ、やっぱ横暴だよなあ」

「はいはい、ちゃんと工夫してやつから文句言わない」

そう言って買い物袋をゴソゴソとまさぐり、特売品の玉子ととろけるチーズを取り出した。

「工夫って、期待してもいいのかよ」

「おう、シェフの腕を舐めんなよ」

少年は不適に笑うと狭い台所へと移動した。

「おら、お待ちどうさん」

「おわあ〜!!」

「すげ、別もんじゃん」

テーブルの上に並べられた本日のメニューに真美香は目を輝かせて、真彦は関心の声を挙げた。

そのメニューは特売品の玉子と冷蔵庫の肥やしになりそうな冷やご飯と残り少ないバターを駆使して作り上げたバターライスと半熟の卵焼き。それに余ったカレーをふんだんに上から掻けて、その上に余熱でじっくり蕩ける特売品のとろけるチーズをトッピングした。

「特製オムカレー!!!」だった。

「どうだ、美味いか？」

コクコクと頷く素直な真美香と「まあな」と少しひねくれた真彦が少年に美味いという事を伝えた。

少年は満足気に頷くと自分も自信作を口に運ぶ。我ながら大成功なできだと、とろけるチーズをクルクルとスプーンで絡めとりニツと笑った。

そんな満足気な少年に弟妹達は彼らなりの最高の表現で誉めた。

「ひーちゃあ、いつでも「お嫁さん」になれるね〜!!」

「ま、ここだけは「女らしい」要素だよな「ひー姉」は」

その言葉に少年、否、少女はスプーンを置くと一言いった。

「お前ら、一言が余計だつつつの!」

「少年」は「少女」だった。とても見た目が活発な「男らしさ」に満ち満ちていたが、れっきとした少しひとより背が高い「女子中学生」だった。

彼女の名は「緑葉 久真」 みどりば ひさま。男前という言葉葉がしっくりとくる。若葉の如き十四歳の「八神学園」中部新入生。今回の主人公である。

「ねえひーちゃあ。かーちゃあきょうおそいのお？」

食事が終わり、洗い物をしていた久真の服をくいくいと引っ張りそんなことを聞いてきた。

「うーん。今日はかーちゃあはな」

久真はエプロンで手を拭きながら視線を真美香に合わせて母がいつ帰るかを答えた。

「今日はとーちゃあのことによってから帰るからみーが起きてる時には帰れないかもな」

久真の父は仕事中の事故で入院中である。幸い、命に別状は無く。保険と労災で入院費と生活費で家庭に負担が掛かることはほとんど無いのだが、たまに母がパート帰りに母が身の回りの世話をしに見舞いに行ったりしている。そのため子供達には少々負担を掛けてい

た。

久真はそれほど負担にも感じていなかったが、まだ幼い真美香は少し寂しい思いをしていた。口には出さないがおそらく真彦も寂しいと感じているかもしれない。

「そつかあ、おそいのかあ」

真美香はやはりシユンとなってしまうた。最近、パートのほうも忙しいのか遅くなる事が多くて真美香はいつも以上に寂しい思いをしているのだろう。まだまだ甘えたい年頃。きつと母と一緒に寝たかったのだろう。

「みー、今日はひーちゃあと一緒に布団で寝るか？」

ポンポンと真美香の頭を久真は優しく叩いて「どうだ？」と聞いた。

「ほんとー!!」

真美香はパツと沈んだ表情が明るくなる。最近、ひとりで寝ることが多かった真美香は凄く嬉しかった。

「ああ、好きな絵本持つてこいな」

「ひーちゃあだいすきー!!」

体当たりで久真の胸にぶつかって嬉しさを表現する真美香。そんな真美香を見ていると久真も嬉しくなる。いつもは寝るまで一緒にいてあげるだけしかしてあげられなかったからこれだけの事で喜んでくれる真美香が久真はとても可愛くてたまらなかった。

「まさちやあもいつしよになる？」

ちょうど真彦が冷蔵庫から麦茶を取りだそうとしていたようで、真美香は「んん？」と小動物みたいな表情で聞いてみた。

「俺、いい」

麦茶を注ぎながら真彦は素っ気なく答えた。

「ひー姉の布団に入る趣味なんてねえし」

「お前はほんと最近は可愛いげないな」

「俺、男だし、可愛いげなんていらねえ」

真彦は一気に麦茶を飲み干してドライな事を言った。

つい最近までは自分の後ろを付いてきたものなのになと思いつつ、久真は軽く溜め息を突いた。

（真彦も難しい年頃だもんな）

「ようし、まさちやあはほつところなあみー。ひーちやあを独り占めだぞう」

鼻と鼻をグリグリとぶつけながら久真は真美香に言った。

「きゃっ！ おひにゃが」

潰れた鼻声でキャッキャッと真美香は喜んだ。

「そうだ、ひーちゃあ。おねがいあるによ」

「ん？　お願い？」

「うん」

鼻のごつつんこを終わらせると突然真美香がそんなことを言った。

「なんだ、みーの言うことならなんでも聞いてやるぞ？」

真美香が久真にお願いをすることは珍しかった。お願いをされるのは素直に嬉しかったので久真はつい何でも言ってしまうた。

「ほんと！　じゃ、ちょっとまってえね！！」

凄く嬉しかったのか真美香はバンザイをしながらテトテとリビングを出ていった。

（いったいどんなお願いだ？）

絵本をいっぱい読んで欲しいのか　と思いながら久真は真美香を待った。

それほど時間は掛からずに真美香は何かを引っ張り出てきた。

「ん、それ・・・・・・まさか」

真美香が手にしたものには見覚えがあった。

それはピンク色のワンピース。これは母が久真のサイズに合わせ

て仕立ててくれたワンピース。母が男っぽい娘に女の子らしい恰好をして欲しいと願って仕立てた。しかし、もともと自分に似合わないと思うピンク色のため、着ることを拒否した服。死ぬほど嫌いなスカートの服。

そんなものを持ってきて真美香は何というつもり何だろうか。

「あのね」

邪気の無い笑顔で服を前に出し、真美香はお願いを言った。

「このふくきてほしいの」

脳天をぶち抜かれるような衝撃が久真を襲った。

「おい、みー？　なんでこれを？」

「うん、ひーちゃあとおそろいだってかーちゃあがみーにもこれつくってくれたのー！」

「・・・・・・・・」

「だからみーとおそろいできてほしいのー！」

「そ、そうか・・・・・・・・」

恐らくこれは母の策略だろう。真美香はピンク色が好きだ。それをお揃いで作ったときたら一緒に着たくなるはず。そして、久真は真美香に弱い。久真に女の子らしい恰好をさせるという目標を達成させるつもりではないかと。

「あのなあ、ひーちゃあには似合わないと思うんだ……他
のお願いじゃダメか？」

とりあえずの抵抗を試みるが

「ひーちゃあ。なんでもっていったよ？ みーはこれがいい」

真美香の意思は固そうだった。

「これでいつしょにおさんばいくの！！」

しかも要望の難度が跳ね上がっていた。ピンク色のスカートで外に出るなど久真にとつて自殺に等しかった。ただでさえ学校にも制服の上着を羽織つてジャージで登校をしている程だというのに。

「良いじゃん。着てやれば」

「はあっ！？」

突然、会話に乱入してくる声。言うまでもなく弟の真彦である。なんだかニヤツとしている気がする。

「俺もひー姉の「女装」には興味ありかなあ。超楽しそう」

「このやろ……他人事だと思つて」

絞め殺してやろうかとブルブルと久真は拳を振るわせて真彦を睨んだ。

「ひー姉。みーのお願いなんでも聞くつて言つたじゃん」

「グッ!!?」

確かに言った。言ってしまったている。

「ひーちゃあ。だめなの」

真美香が悲しそうな表情になる。

「あ、あのな」

「大丈夫だぞみー。ひーちゃあは「絶対」に嘘はつかないからな!」

「お、おおまあええはああつつつ!!」

「ひーちゃあ。ほんと?」

「あ………」

「ひーちゃあ」

「その………時間掛かっていいんなら」

時間という条件を貰って、久真は折れた。凄く期待している妹を裏切らないために、弟妹に嘘をつかない所を見せるために。

ただ、恐ろしく似合わないだろうと久真は思った。

恐ろしく時間が掛かりそうだとも。

「マジでヤベエことになりやがった……」

下校しながら久真は頭を抱えていた。昨日の真美香のお願いの事を朝からずっと考えている。正直、今日は一日なにをしたかも覚えていない。

「ピンク……スカート……ダメだ」

自分のスカート姿を想像すると気持ち悪くなる。久真はそれほどスカートが好きではなかった。

男の子が欲しかった父親から男っぽく育てられた久真はスカートには物凄い偏見を持っていた。

「あんなヒラヒラしたもんは男の履くもんじゃねえ！」

と、小学校の中頃までは力説していたし、真彦が生まれてから母が女の子らしい恰好をさせようと試みたものの当時四歳ながら久真は

「こんなのちがう！　いらない！！」

暴れに暴れて突っぱねて、つい最近の八神学園の入学式もスカートが嫌で、当日熱を出して欠席してしまった程だ。

普通の学校生活も「ジャージは俺の正装」といい、生活指導を呆れさせ、無理矢理納得させてしまったのだ。

クラスの同級生以外は久真の事を本当に男子だと思っている生徒も少なからずいる事だろう。

それほど徹底したスカート嫌いだが、今回はどうにもまずかった。久真がどうにも甘くなってしまう妹自身からのお願いだ。しかも久真がこの世で最も似合わないと思っているピンク色だ。一生袖を通すことは無いと思っていたワンピースなのだ。

「マジで……………挫けそうだ……………」

足どりが重い。真美香が凄く期待している。無邪気に瞳を輝かせている。やっぱり、やめないかなんて口が裂けても言えない。やるしかないのだ。

「とりあえず、先ずはリハビリの一步を踏み出してみるか……………」

やりたくない。凄くやりたくないが前には進まなければならない。とにかく、誰にも見られずに実行してみよう。

色々とブツブツ呟きながら思い詰めた表情で歩く姿は周りの人が道をあけるほどの迫力と怪しさを醸し出していたが、本人はまるで気付かずに、入学祝いに父が買ってくれたiPodの電源を入れていた。

ブツブツと呟きつつ、久真は人気の無い森林公園へと迷い込んでいた。普段はあまり通らない場所だが、考えごとをしている間にいつもの道からずれていたようだ。久真はまだ道から外れているのを気付いていないようだ。

「終われば……………OK、耐えてやる。俺は、耐えて」

グツと握り拳を固めた時。

「むぎゅっ」

何やら妙な感触と妙な弱々しい声を聞いた。さすがにそれには久真も気づき、足元を見た。

「・・・・・・・・」

妙に生々しい感触の緑色の物体を踏んづけていた。久真はそれを持ち上げていた。

「ふあゝ」

それは妙な声を挙げる。見た感じは緑色のヌイグルミだった。

「なんだ？ タヌキのヌイグルミか？ 誰か捨てていったのか？」

フルフルと振ってみるとそれは

「をゝ、をゝ、おゝ」

と訳の解らない声を挙げる。

「最近のおもちゃか？ センサーで反応すんのかな？」

試しにデコピンを試してみた。

「ムニッ！」

ペシンと良い音を起てて、ガクンと首が揺れ、それはゆっくりと目を開けた。

「え？」

その目の奥に深い森の中にいるようなビジョンが一瞬見えて、それはカッと目を見開いて久真を見て

「こんにちはだノ」

緑色のフワフワとした片手を挙げて挨拶をした。

「・・・・・・・・」

目をパチパチと見開きを繰り返して、久真は呟いた。

「・・・・・・・・寝ぼけてんな、俺」

6・降臨！ 樹の乙女！！

「・・・・・・・・寝ぼけてんな、俺」

久真は眉間を強く押さえて頭を振る。
ヌイグルミが喋るわけが無いのだ。

「キミは、誰なの？」

だが、目の前で声が聞こえる。ヌイグルミが喋っている。久真を誰かと聞いてくる。

「・・・・・・・・あゝ」

思わず唸ってしまう。こんなバカなはずが無いと。

だが、ヌイグルミはまたも話し掛けてくる。

「アー？ アーはベルアっていうノ。「ベルア・アルベ」がアーの名前なの。で、キミは誰なの？ アーはキミの事が知りたいの」

アーというのは自分という意味だろうか？ 久真の唸り声を自分の名前を聞かれたと勘違いしたのだろうか？ そして、やはりヌイグルミは自分の意思でしっかりと喋っている。錯覚でも何でもない。久真は信じられないながらも認めるしかなかった。

「なにか欲しいノ。アーは本当にキミの事が知りたいノ」

「久真。緑葉 久真」

久真は目の前の現実を認め、ヌイグルミ ベルアの知りたがっ

る自分の名を教えた。相手も名乗っているので自分も名乗る必要があると思ったからだ。

「ヒサマ？　なんだか不思議な響きの名前だノ」

ベルアは大きな瞳をクリクリと動かして何か考えているようだった。不思議な響きと言った。確かに珍しい名前だとよく言われる。男の子か女の子か解らない名前だと。外見と名前を初めて見たり聞いたりした人は必ずと言っていいほど久真を男の子と勘違いする。

「でも、綺麗な響きの名前だノ。「女の子」にはぴったりだとベルアは思うノ」

「お前？　俺が女だつて解るのか？」

久真は驚いた。初対面で自分を女だと見抜かれたのはもしかしたら初めての事かも知れない。

「当たり前だノ」

ヌイグルミ　ベルアは解つて当たり前だと言った。

「こんな素敵な母性に満ち溢れた　樹　の力を持っている子が、女の子でないはずがないノ」

「キノチカラ？」

ヌイグルミ　ベルアは妙な事を言い出した。

「なんだそりゃ？」

「うん、 樹 の力とは心の奥にある。包み込む母性の強いひとの中に生まれる力のことだノ」

「ツツミコムボセイ？」

こいつは何を言っているんだ？ と久真は思った。そんな母性というものは自分には程遠いと感じていたからだ。

「よくわかっていないようだから説明してあげるノ。でもその前に」

「ん？」

「……そろそろ降ろして欲しいノ。ちょっと首が痛いノ」

言われて久真はベルアの首根っこを掴んだまま会話していることに気づいた。

「悪い」と久真は地面にベルアを降ろした。ベルアは首周りをポフポフと叩いて首を振った。

「あゝ、地面に足が付くと気持ちいいノ」

ベルアは地面をピョンピョンと跳び、ホンワカとリラックスした表情となる。

「おい、大丈夫か？」

気づかなかったとはいえ、ずっと首根っこを掴んでいたことに久真は少々罪悪感を覚えていた。

「いや、気にすることはないノ。アーも驚かせてしまったのがいけないノ」

フルフルと片手を振って、ベルアは気にするなと言ってくれた。案外いいやつかも知れないと久真は思った。

「それよりも、約束どおり 樹 の力のことをしっかりと話すノ」

ベルアは自分が座れそうな石を見つけると、ポフツと少し気の抜けそうな音を鳴らして座り込んだ。

「まずは言うておくノ。実はアーはこことは別の世界から来たんだノ」

「別の世界……へえ、なんか、納得」

久真は自分でも驚くほどに納得ができた。既に目の前に常識はずれな存在がいるのだ。別の世界のひとつやふたつあってもおかしくなイと思えた。普段は絶対に考えない思考が形成されているような気が久真はした。

「うん、物分かりが良くて助かるノ。もっと飛び上がって驚くものだと思ったノ」

「いや、なんつつか、驚く所はとくに飛んじまってるというか……なんというかつつう感じっていうのか？……………なに言うてんの俺？」

どうやら多少の混乱はまだ残っているようだった。

「話を続けてもいいノ？」

「ん？ おお、すまない。続けて」

多少ずれた話の腰を戻し、ベルアの話は続けられた。

「アーの世界は「エレメンテ」といつてアーは 樹 の 守護
の勇者と呼ばれていたノ」

（ 樹 の 守護 の勇者、ねえ。勇者つて、ゲームとかに出てく
るあれか？）

「アーの世界「エレメンテ」はとても綺麗な世界だったの……
・だけど」

ベルアは突然声を暗くした。

「別の世界からの外敵が「エレメンテ」を襲ったの。素敵なアーの
世界は、「エレメンテ」は、このままでは終わってしまうの。それ
を防ぐために、アー達は別の世界に跳んだノ。「エレメンテ」に伝
わる伝説を信じて、パートナーを探しに」

話が大きくなりすぎて、久真は目を瞬きさせる。確か、 樹 の力
についての話だったはずだが。

「えーと、つまりは、アンタはその世界を救うために俺たちの世
界に来たということか？」

「その通りだの。アーは協力な 樹 の力を持ったパートナーを探しているんだノ」

ベルアは瞳に力を込めてジッと久真を見た。

「なんだよ？」

急にジッと見つめられて久真は首を傾げた。

「きつと、アーの感じたものは間違つてないノ」

「なんかいったか？」

「ん、なんでもないノ」

ベルアは首を振って、なんでもないという。だが、雰囲気は何でもないといった感じではない。久真はトントんと額を叩いて何か言おうと思ったが止めておいた。

「アーの探す 樹 の力は誰にも負けない包まれる母性。差しのべる愛を振りまけるひとが持っている力なノ。それが、心の中にある 樹 の力なノ」

「はあ、その包まれる母性？ 差しのべる愛？ それを振りまけるひと？ それが 樹 力つてえの？ そんなもんが俺の中にもあるつてえの？」

聞けば聞くほど自分とは程遠いと感じた。どちらかというと久真には苦手な分野だと思っている。

「よく解ったような解んねえような……まあ、その 樹の力が俺の中ですっげえ強いてのはおたくの勘違いだと思っけど」

そう、きつと勘違いだ。自分には母性も差しのべる愛もそれらを振りまく術も持っていない。あるのは協調性の無い頑固さと家族以外の他人には無頓着な自分。振りまくのは男みtainな外見だけだ。

だから勘違いだ。

「そんなことはないノ!!」

勘違いという久真の言葉に、ベルアは立ち上がって叫んだ。

「キミには母性があるノ。愛があるノ。知らずにそれらを振りまいているはずだノ!! そうじゃなかったら 樹 力を感じられるはずがないノ。弱っていたアーがこんなに動けるようになっていないノ!!」

「え、いや」

「ヒサマの 樹 の力は凄いノ! アーが、アーがパー…………トナー……………」

「お、おい!」

一気に叫んだベルアは急に倒れ込み、久真の腕の中に収まった。気を失っているようだ。

「いつたい…………どうしたっていうんだよ」

久真は啞然とベルアを見つめるだけだった。

「……………起きねえな」

久真は腕組みをして布団の上に寝かせたベルアを見つめた。

結局、いつこうに目を覚まさないベルアを久真は家まで連れてきてしまった。幸い、まだ誰も帰ってきてはいないのでなんなく部屋まで移動することはできたが、まだベルアは目を覚まさなかった。

「まあ、でも」

久真は手をベルアの鼻の位置に持っていつてみる。微かな温い風が手に伝わってくる。

「寝てるだけみたいだし、大丈夫だろう」

思えば最初に見たときは酷くグツタリしていた気がする。きっと、一気に喋りすぎて疲れが戻ってきてしまったのだろう。起きたら色々と聞いてみようと決めつつ、久真は部屋の隅に架けてあるハンガーを見た。

「こっちもこっちで解決しなきゃなんねえ問題だよな……………」

「

そのハンガーにはあのピンクのワンピースが架けてあった。

「約束……だもんなあ」

真美香とこのワンピースをお揃いで着て散歩をするという約束。
ワンピースを手に取ってみる。ガラス窓にうつすらと浮かぶ自分の姿。ワンピースを上から体に合わせてみる。

（やっぱり、恐ろしく似合わねえ……）

ボサボサの髪に化粧気の無い顔。そこに浮かべる苦笑い。

どこをとってもピンク色が似合うとは思えない。いや、似合う似合わない以前に。あのスカートの下からあたるスースーとした風がなんと落ち着かない。

ピンク色も好きではない。他人はいい。だが、自分が着るとなるとたまらなくきつい。

ピンク色とスカートは一生相容れ無いなと久真は改めて思った。

だけど

「みー。すげえ楽しみにしてたよなあ」

凄く嬉しそうな真美香の姿が浮かぶ。ピンク色のワンピースを着て動きまわっている映像だ。

想像の中の真美香にはとてもピンクが似合っていた。

真美香は自分とは違う。ちゃんとした女の子になれるだろう。きっと可愛い。可愛くなるはず。

だけど、ここでもし自分が拒否したらどうなる。真美香は女の子な恰好をもしかしたら諦めてしまいかもしれない。

それはダメだ。だから、一度くらいの我慢をしよう。自分にはできるはずだ。

「とにかく、リハビリだな」

久真はもうひとつのハンガーを手取る。

昨日から考えてはいた。これならば、まだ許容できるかもしれない。上着だけは毎日着ていつているのだ。全部着てしまえば良いだけ。

「これを着て、外を少しだけ……歩く！」

久真の手には八神学園の制服が、上着だけではないちゃんとスカートまで揃った完全な制服があった。

服を脱ぐ度にたまに思うことがある。体ばかり大きくて、自分の思うような筋肉は付かない。もつと大人みたいな筋肉が欲しい。日に日に女らしくなってくる自分の体を隠したい。

いくら外見や性格が男でも体つきは隠せなくなってくる。俺の心は俺の体に裏切られる。俺の男としての十二年間を否定されている気がした。俺はまだ、男としての俺でいたいのに。

スカートを見る度に思う。なぜこんなものを女は履くのか。スーッして無防備なこの一枚の布切れに、何の意味があるんだ。なんで男は履かないんだ。凄く不公平。

母親に一度だけ無理矢理履かされたスカート。あの時の俺は暴れ

てスカートをクシャクシャにして「もうこんなのやだー！」と大泣きに泣いたのを思い出す。凄く消したい思い出のひとつ。

やっぱりスカートは気に入らないな。俺の中ではありえない。

こうやってネクタイを締める時は男と女も変わらない。引き締まる。シャンとするという言葉がすっきりとはまる。ネクタイは嫌いじゃない。制服のここだけは認めてもいい。

しかし……………。

鏡の前に久真は立った。そこにはスラリとした制服姿の久真がいた。両手を前に出してスカートを隠そうと前屈みになり苦笑いを浮かべる自分の姿。

(う……………げ)

たまらない違和感だ。やっぱりこんなものは自分には似合わない。こんなんで外に出るなんて

(死ねる……………マジで)

だが、真美香を裏切るわけにはいかない。これは通過点に過ぎない。最終目標はあのピンク色のワンピースでの散歩だ。

これはただのリハビリだ。少しずつ馴らしていくリハビリだ。だから

「今日は・・・・・・・・ここまでに」

この姿で外に出るのはまた今度だ。まだまだ時間を掛けていこう。

久真は早く脱ぎ捨てようとスカートに手を掛ける。

「もうやめてしまうのかノ？」

が、止めた。声がする。寝てると思って油断していた。ヌイグルミみたいなもんだと気にしなかった。

ゆっくりと久真は首だけを後ろに向けた。

「すごく可愛いのに勿体無いノ」

そこには布団の上で胡座を組んだヌイグルミ ベルアの姿があった。

「い、いつ起きたんだよ・・・・・・・・」

「着替えをするときから起きてたノ」

「着替えをするときから」つまりは着替えるのを見られていたということ。

（まったく・・・・・・・・気づかなかった）

タラリと冷や汗が流れる。

「ヒサマのお尻は少し大きいノ？ アーの方に突きだしているせいかノ」

「み、みんなよ!？」

お尻を慌てて両手で隠し、ベルアの方に体を向けて後退りをする。
なんだか、妙に恥ずかしい。

「やっぱりヒサマは女の子だノ」

ベルアは立ち上がって笑みを作る。

「な、なに言っただよ!？」

「久真は魅力的な女の子なんだと言ったノ。アーの目に狂いは無かったノ」

「だから、なにを」

魅力的な女の子などと言われたことなど、久真はこれまで一度たりとも言われた事はない。そんな言葉で自分が動揺する事は無いと思っていたのだが、いざ言われてみると顔が熱くなってくる。

「ヒサマはなにか体を動かしているノ? とても無駄の無いプロポーションだノ」

「ま、まあ、それなりに運動は……で、またなに言っただよ! お前変だぞ!？」

体を両手でできる限り隠して、久真は壁際まで後ずさる。その様子はとても女の子ぽいと久真は気づかない。

「事実を言っているだけなノ」

「事実もクソもあるか！ 今度言ったら殴る！！」

久真が凄みを聞かせて睨む。が、今のモジモジとした姿ではとても迫力を出すことはできなかった。

「ちょ、ちよつと、少しだけ出ていってくれよ。着替えるから」

久真はドアを指差す。幸いまだ誰も帰っていない。速攻で着替えて中に戻せば問題無いはず。だが、ベルアは出ていく様子は無く目をパチクリとさせて

「着替えるなんて勿体ないノ」

「は？」

次の瞬間、久真に突拍子も無いことを言った。

「外に出てみんなに見せるノ」

「！！！？ そんなのできるわけねえだろっ！！！？」

久真は吠えた。だが、ベルアは首を傾げる。

「なんでかノ？ そのつもりで着替えてたはずだノ？」

どうやら、着替えの時に久真は無意識に独り言を呟きそれをベルアは聞いていたようだ。

「なんでもなにもない！ 俺は着替えるんだ！ 頼むから出ていけよ！！？」

久真は頑なに「着替える」「出ていけ」を繰り返す。

「ん、仕方ないの」

ベルアは頷いた。久真は諦めてくれたかとホッとした。

「ちょっと反則だけど、実力行使だノ!!」

だが、それは甘かった。

「な!!!??」

久真は緑の光に包まれた。

（ヒサマ、ヒサマ。起きるのヒサマ）

遠くから声が聞こえる。久真はその声に呼ばれるようにゆっくりと目を開ける。

「ん、んん?」

久真は寝ぼけ眼で周りを見る。なにやら噴水が目の前に見える。中央にはなにか鳩みたいなモニュメントがある。

「近所の……緑花公園?」

見覚えがある。最近は真美香を遊ばしに来ることではか来なくなつたが、この噴水は外からでもよく見えたから間違いない。ここは近所の「緑花公園」だ。

久真は噴水近くのベンチの上で眠っていたようだ。

「あれ？ 確か俺は家で・・・・・・・・」

段々と頭がはつきりとして、記憶が甦る。そして、緑色の光に包まれた所で記憶が途絶えている。

格好は——制服のままで。

久真は青くなつた。こんな恰好で自分はいま外に出ているという事実に。

「おい、どこにいった。おい!？」

外に連れ出したと思われる張本人の姿が無い。あの緑色のモフモフがどこにもいない。

（こっちだノ）

辺りを見回す久真の左腕から声がする。左腕を上げてみる。そこにはなにやら緑色の丸い水晶の付いたブレスレットが巻かれていた。

「・・・・・・・・なんだ、こりゃ」

久真はブレスレットを指で弾いてみた。

（あまり乱暴にしないでほしいノ）

「わあああつつ！！？」

プレスレットが喋った。久真は思わずのけ反ってしまった。しかもこの声は。

「お、お前、マジで？」

（マジでだノ）

「こんなこと、できるのか……………」

（アーは モフ族）だから、心の力があればどんな物にもなれるんだノ）

「マジかよ」

久真は信じられない気持ちでベルアのプレスレットを眺めながら頭を掻いた。

「……………んん？」

なにか頭に違和感を感じた。

「お前、俺の頭になにかしたか？」

掻いた手で髪を空いて見ると、サラリとしていた。ボサボサじゃない。頭がセットされている。整っている。

（せっかくだからちょっといじってみたノ。ボサボサじゃ可愛く

ないノ」

「なんか、少しだけ俺の体がハーブ臭いんだが」

（臭くないノ。良い香りなノ。ちょっとだけ 樹 の力で チャー
ム してみたの。使用者の魅力を底上げしてくれる凄いものなノ）

なにやら自信満々に余計な事をしてくれたようだとか久真は顔をひき
つらせた。

樹 の力を使つたとベルアは言つた。となるとあの緑の光も。

（もちろんアーなノ。ちょっと反則だけど 樹 の催眠でここま
で連れてきたの）

「お前………なにしてんの!？」

（ノツツ!!?）

久真はブレスレットのベルアに向かって叫んだ。ベルアは驚いた声
を挙げる。

「誰がそんなの頼んだ! つうか催眠でなんだ!? ヤベエなん
てもんじゃないんすけど!!?」

（そこは………反省なノ。でも、アーは謝らないノ）

「おま! なに考えてるかしんねえけど。とにかく家に帰るぞ。こ
んなん早く脱ぎ捨てたいんだよ」

久真はキョロキョロと辺りを見回す。幸い、まだ誰もいないようだ。
噴水が勢いよく吹き出しているなかをコッソリと動こうとする。

（それは許さないノ）

だが、体はベンチから離れなかった。なにか強い力に引っ張られているようだ。その強い力は恐らく

「いい加減に、しろよ」

久真はプレスレットを握る。これはベルアがやっているに違いなかった。

（なんで？ 元々その姿で、外に出るつもりだったはずなノ）

「グッ!？」

確かに、元々は外に出てリハビリをするつもりだった。そう、真美香との約束のために必要な事だ。最初は覚悟を決めて着替えたはずなのに、自分の姿に耐えきれなくなっていた。むしろ今の状態はリハビリの大チャンスなのではないだろうか？

「おい・・・・・・・・」

「ノ？」

久真は抵抗を止めて力を抜いてベンチにもたれ掛かった。

「言つとくが、俺は絶対に可愛くないぞ」

（まだそんなことを言ってるノ？ 自分の事を知らないとは恐ろしいノ）

「うるさい。とりあえず、リハビリは続けることにした。悪いけど、

この チャーム てのを解いてくんね？」

(ノ?)

「ハーブ臭いのがきつい」

(良い香りなのに……あ、もうちょっと待つノ)

「あん？ なんだよ」

(せっかくだから自分の魅力を再確認してみると良いノ)

ベルアが訳のわからない事を言うと同時に目の前の噴水が降りた。

「い!？」

噴水の向こう側に人がいた。凄く真面目そうな男の子がこちらをジツと見ていた。何だろう、自分の姿はそんなにおかしいのだろうか
と久真は何処かに隠れたい気分だが、その場に縫い付けられたように、動けなかった。

「ん？ なにみてんの渡 わたり 先輩？」

ちょうどその時、男の子の方にジュースを二本持って近づいてくる女の子の姿が見えた。

「うわ！ 由麻 ゆま ちゃん!？」

男の子は背後からの声に物凄く驚いたようで、あたふたと慌てている。そんな彼を尻目に少女は彼の体からひよっこりと顔を出しこちらを見る。ソバージュの髪に色黒の肌と少しきつめな瞳と少しだけ

自己主張の強い大きな胸が特徴的な少女だ。

「あの制服。うちの学園のじゃん。へー、あんな綺麗な子がいたんだ」

少女は関心するように顎を撫でて久真を眺めてから、ジト目で隣の彼を見つめた。

「それにしても、ああいうタイプが好みなんだ先輩」

「ち、違うよ!？」

「あ、いいですいいです。どうせあたしは自黒っすから。綺麗系は絶対に無理ですし」

「ちょ、待ってよ由麻ちゃん」

「やだな先輩。あたしら別に付き合って決めた訳じゃないし、気安く名前呼ばないで」

「え、でも、呼んでもいいって」

「心変わりしました。たったいま」

「そんな、機嫌直してよ。僕が悪かったから」

「は、あたし別に怒って無いし、先輩が誰に鼻の下伸ばそうが関係ないから。じゃ、あたしはこれで」

「ゆ、間弓さん！ 待って、話を聞いてよ!？」

なにやら彼女の方が一方的な痴話喧嘩を始めて、勝手に怒ってスタスタと歩いていってしまう。その後を泣きそうな顔で彼が追いかけていき、なにやら蚊帳の外のまま久真は再びひとりになった。

（ん、恐ろしい効果だノ）

「お前、あの男のひとになにかしたのか？……」

（アーは特になにもしてないの）

「ウソつけよ。だったらなんでこっち見てたんだよ。巨乳の姉ちゃんも急に怒りだしたし……そうか、これがチャームてやつだな」

久真は合点がいったと宙を仰いだ。このハーブ臭いやつの力。全く面倒なものと久真は溜め息を突いた。

（ん？ チャームは関係無いの？）

が、ベルアはこれを否定した。

（チャームはもつと近づかないと効果は得られないノ。本当はあの男の子が近づいてくれるのを狙ってたノ）

「おいおい、じゃあなんで」

（これは久真の素の魅力というやつだノ。あの男の子が見とれてしまっただけに）

「勘弁してくれ……俺にはそんなもんねえよ」

久真は顔を手で覆った。

（でもちよつとだけ、アーの「メイク」も貢献したかもしれないの）

「あぁっ！！？」

久真はベルアの言葉に目を見開いた。

（せつかくだからナチュラルなお化粧もしてみたの）

「だからお前。なにしてんの！！？」

再び久真はブレスレットに向けて叫び。なんだか異様に疲れた気がしてベンチに体を預けた。しばらく動きたくなかった。

「お前さあ、結構衰弱してたように見えただけ。結構元気良くな？」

（回復力には昔から定評がある。強い 樹 の力が近くにあれば常に充電常態だノ）

「はは、わけわかんね」

久真は苦笑して、再び水が噴き出した噴水を見上げた。

「綺麗だな………噴水」

なんとなく見上げた噴水はとても綺麗に感じた。そういえば、前に

真美香と真彦と散歩に来たときに真美香がちょっと変わった形の石を見つけて真彦が噴水に落としちゃったけか。と、久真は思い出した。あの時は、真美香がしょんぼりとしてしまい、真彦が珍しく責任を感じて噴水に飛び込んで全身ずぶ濡れになり、久真が「後先考えずに動くな！」と怒りながら、ダッシュで家まで帰った。結局石は見つけられないままだった。あの変な形の石はまだあるのだろうか？

（どうしたノ？）

噴水をジッと見てるとベルアが不思議そうに尋ねてきた。

「別に、ちよつと懐かしい思い出がここにあったのを思い出した」

立ち上がって噴水に近づく。

（濡れちゃうノ）

「ちびつとぐらいなら平気だつて」

目の前に見える噴水も真美香の考える散歩コースには入っているのだろうか？ 真美香はどれくらい楽しみにしているんだろう。ピンクのワンピースを着るのは、それで人前に出るのは本当に我慢できない事か？ この変なヌイグルミみたいなやつがやったお節介はりハビリのきっかけになってるのではないか？ 噴水を見上げていると色んな事を考える。

「なあ、やっぱチャームつての解いてくれ」

久真はもう一度ベルアに言った。

（ノ？）

「別に注目されたくてこれ着た訳じゃない。だから」

（なにかはつきりした理由があるノ？）

「ああ、マジで大事な理由だよ」

（うん、わかったノ）

ベルアは割とすんなり了承した。

「結構、あつさりだな」

（別に、同じ「女」として自分の可愛さを否定するヒサマが許せなかったただけだノ）

「いや、俺は自分が可愛いなんて絶対に思わないが……え、お前って女だったの！？」

久真はベルアが女の子だということに心底驚いた。

（失礼だノ。どこから見てもアーは女の子だノ。それと、そろそろ名前を呼んで欲しいノ）

「いや、解んねえと思うけど、そこはひとの事は言えないのか俺は」

頬を掻いて、久真はブレスレットのベルアを見る。

「まあその、すまん」

（名前は？）

「ああ、名前？」

そんなに名前を言っ
て欲しいか？
と思
いながら久真は噴水を見上げてベルアの名前を

「えーと、べー——」

言う瞬間。目の前で信じられない事が起きた。

噴水が、目の前で破裂するように吹き飛んだのだ。

「なっ！！？」

久真は水飛沫とコンクリートの塊と共にベンチの後ろまで吹き飛ばされた。

「な、何が、起こったんだよ」

久真は切れた唇の血を拭いながら煙立ち込める正面を見た。

倒壊した噴水の上に

『ギルル~~~~！！！！』

立ち込める煙を切り裂き、チェーンソーの両腕を持った巨大ロボットのよう
な化け物がそこにいた。

「あ……………ああ」

なんだよコレ！！？

久真は目の前の存在が信じられなかった。

「な、んの、冗談だよ」

こんなものが、いるわけが。

（こいつ！ アブテム！？）

ベルアが突然ブレスレットの変身するとき、久真の隣に飛び出した。その瞳には、久真がいままでに見たことがない怒りの色が見えた。

「なんだよ………アブテムって？」

「少し前に話した。アー達の敵。こいつはそいつらが繰り出す怪物、アーブ・モンスターだノ！？」

「アーブ・モンスター？………お前の敵？」

こんな馬鹿デカイやつとこいつは戦ってんのか？ 久真は驚愕した。こんな自分よりも小さな体で、自分よりも数倍も大きな怪物に立ち向かっていけるなんて。

「ヒサマ」

その小さき者は大きな瞳に強い意志を持って久真を見つめてくる。

「とても図々しいお願いをするノ………」

その瞳に久真は

「アーひとりではこいつには勝てないの」

強く、強烈な何かを

「けど、ヒサマとなら勝てるの。ヒサマの力をアーに貸して欲しいの……」

感じ取り、心の奥で何かが震えた。

「なにをすりゃいい……」

恐ろしい気持ちよりも、勇ましい心が勝利久真は立ち上がった。

「ありがとうなノ。久真は心の感じるままに任せるだけでいいの……」

ベルアの瞳に 樹 息吹が宿り、緑の香る空気が辺りを包み込む。それは視覚的に緑色に見えた。

——グラン・ガードセット……

久真の頭にベルアの声が響く。 樹 の香りが鼻を擽る。ベルアの体がまるで毛糸をほどこように緑の糸になっていく。そして、その糸が久真の両手に絡みつき。まるで逆再生されるように手の形に形成されてゆく。

久真の両手にパワーグローブが完成する。右の手の甲にはブレスレット時の水晶が埋め込まれ、一筋の線が入っていた。

（ヒサマ！ 受けとるノ！！）

ベルアの声の響きと共に緑の帯が渦を巻き、一枚のカードが現れる。

（アーの全ての力だノ！！）

久真は 樹 のカードをしっかりと左手で握り締め

「へ、カッコイイじゃん！！」

右手の水晶にスライドさせる。

——ヴァル・ガードアップ！ 樹 のエレメス！！

カードが緑のの帯となり、久真の頭上に降り注ぐ。久真は飛び上がり、空中を横に一回転する。緑の帯が身体中に巻き付き、新緑の葉となり舞い上がる。

脚が開放され制服のスカートが緑のスカートドレスに。

腕と体が開放され 樹 のオーラドレスが露となる。

それはまるで羽化した蝶の如く。

舞い上がる新緑の葉が久真の髪を攪り、溶け込む。新緑の葉の色が髪へと移りゆく。

葉が割れ、瞳の縁に新たなメイクを施す。 樹 のアイシャドー。葉が唇を射止め、溶け込み新たなチークとなる。 樹 のチーク。

瞳の前を二枚の葉が近付き溶けるように消失する。

瞳がより強い輝きを得る。それはまるでエメラルドの瞳。

久真の両手が重なりパチン！ と心地良い音をならし、両腕を十字に作り、荒々しく両腕を開放し降り降ろす。 大地 が揺れ、ここに彼女は降臨する。この 大地 に美しく勇ましいその姿を

―― 大地 に根付く 樹 の衣！ 包み込む 守護 の 乙女
！ ヴァルグランデール ！！

キツ！ と力強いエメラルドの瞳を目の前の怪物へと向け、脚を踏み締める。

―― あいつを操っているやつがいるはずだノ。ヒサマ、気をつける
ノ――

頭に響くベルアの声に久真、 ヴァルグランデール は頷き

「了、解！！」

跳躍した。一気にチェインソーの怪物、アープ・モンスター「ギュルガ」との距離を詰める。

「ウオオウラァッ！！」

『ギュリイイツッ！！？』

拳を顔面に叩き込み、やつの鎮座する倒壊した噴水の上から叩き落とす。その巨体が揺らぎ地面を転がる。 ヴァルグランデール が噴水の上に降り立つ。

「おい」

怒りに燃えるエメラルドの瞳をギュルガに向け、　ヴァルグランディール　は呟く。

「この噴水にはな、弟と妹との思い出があつたんだよ。なんでもない事だけど、確かめたいこともあつたんだ。それをメチャクチャにしやがって……」

そして、言い放つ！

「絶対に許さねえぞつー！」

『ギュルルルツツー！』

その言葉を理解したのかは解らない。だが、解るのはひとつ。ギュルガが怒り狂つたように　ヴァルグランディール　に両腕のチェインソーを回転させながら突撃してきた。

「慌てんな。すぐにぶつ飛ばしてやるんだからよ」

ヴァルグランディール　も噴水からギュルガに向け、突撃をする。その片手は胸元のタイの上に置き、一気に地面を殴りつけた。

「クレイアタックー！」

地面が盛り上がり、まるで粘土のようになり　ヴァルグランディール　の前に壁を形成する。

—— やってやるノー！——

「おうつー！」

『ギルルツッ!!!』

前方に現れた壁をギウルガは力任せに破壊する。暴力的なチェーンソーの石切音が響き壁は倒壊する。大きな壁の破片を無数に残したまま。

「食らいやがれっ!」

ギウルガの視界にタイの上に拳を固め、その掌を開放するまでのヴァルグランディール の動きが見える。

「暴れる! ロックダンス!」

ヴァルグランディール の叫びを合図に壁の破片がまるで生き物のように次々とギウルガに襲いかかる。

『ギユリイイガッツ!!!!?!?』

次々と突き刺さる破片に、ギウルガは悲鳴に近い声を上げる。その巨体が揺らぐ。

「みたか!」

——油断はダメなノ!——

地面に着地すると同時にベルアが叫ぶ。油断はダメ。それは的中する。

『ギユリイイッツ!!!!』

体勢を崩しながらギルガがチェーンソーを一直線に降り下ろしてきた。

「ちっ!？」

ヴァルグランディールは舌打ちをして、即座にタイの上で両腕をクロスし、頭上に押し上げた。

「ガイアテクター!!」

チェーンソーとヴァルグランディールの腕がぶつかり火花を散らす。

「ゲウウウツツ!!」

チェーンソーがヴァルグランディールを押し始める。歯を食い縛り、その場に耐えるヴァルグランディール

『ギルルルルツツ!!』

だが容赦なくギルガは全体中を掛けて押さえ込んだ。

そして

バキーン!! と音を起てて競り合いの決着が着いた。

『グツガガッ!!?』

「う………お」

地面にチェーンソーが突き刺さる。

だが、それは真つ二つに折られたチェーンソーだった。　ヴァルグランディール　は耐えきり、打ち負かしたのだ。

ガイアテクターによる強固な防御力がなせる業であった。

「俺たちの」

――勝ちだノ！――

ガイアテクターを解いた　ヴァルグランディール　の回転蹴りがギユルガの腹部に叩き込まれ上空へと飛ぶ。

――一撃で決めるノ！――

「オツケイ！」

上空を見上げ、とどめの力を開放する。

――グラン　ガードターン！

パワーグローブの水晶を回転させる。

――オン　ブーステック！

両袖に新緑の葉が浮かび上がり、飛び上がる。腕が露となる。

スカートに新緑の葉が浮かび上がり、飛び上がる。脚が露となる。

飛び上がった葉が右手に集まり、　ヴァルグランディール　がそれを掴み、前方に押し出す。

「グランデイルシールド!!」

そこに現れるは、巨大な盾。何者をも通さない。深緑の盾が召喚された。

その巨大な盾を ヴァルグランデイル は

「ヤアアツツ!!?」

上空のギュルガに向けて投擲する。高速で回転し、グランデイルシールドがギュルガを捉える。

『ギュリイイツ!!?』

ギュルガが硬直し、グランデイルシールドがギュルガの巨体を叩き落とす。

そして、 大地 立つ ヴァルグランデイル が拳を振り上げる。

「グラント!!」

拳とグランデイルシールドから緑の輝きが解き放たれる。

「フィナーレ!!」

眩い光線がギュルガを圧縮し、緑の光となった。

緑の光は葉の形となり大地に降り注ぎ、戦いの跡を修整していった。

「噴水……元に戻ったのか？」

再生した噴水を見上げながら ヴアルグランディール は呟いた。

——アーたちがあいつらを倒すと元に戻るノ。言ってなかったノ？

「聞いてねえ、けど」

ヴァルグランディール は胸を撫で下ろした。

「マジで良かったああ」

満面の笑顔で再び噴水を見上げた。

「ん？」

その時、 ヴアルグランディール の視界に何かが映る。

——どうしたノ？——

ベルアの言葉に返事ができなかった。ただ、上空に見える大きな点と小さな点を見上げるだけ。それらは太陽を背に重なり、やがて眩しい炎 が吹き上がり。

「なっ！！？」

赤い残像を ヴアルグランディール の瞳に映し、弾丸のように横を霞めていった。啞然と立ち尽くし、 ヴアルグランディール は蒸気のような煙を噴き上げるそれを見た。

風が揺らぎ、蒸気が一気に晴れて行く。

——これは、まさか！——

「……………太陽みてえだ」

そこに現れた存在に、ベルアは信じられないものを見たように驚き、ヴァルグランデールはただ眺め、呟いていた。

そこには一人の少女が立っていた。燃えるような赤い髪のポニータールと、赤い炎のエレメス。真つ赤な大剣を両手に握りしめたまま、紅いルビーの瞳をパチクリと瞬かせていた。

そして、一陣の風が彼女のポニータールを揺らした。

——炎の守護の乙女？——

6・降臨！ 樹の乙女！！（後書き）

樹の話が終了です。文章が良くないできになってしまいました
が、最後までお付き合い本当にありがとうございました。

次は 炎 と 樹 が出会います。が、もしかしたら変化球を投
げるかもしれません。

今度はもっと設定を生かせるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562j/>

守護の乙女 「ヴァルガーナ」

2010年10月10日00時41分発行